

# 全国同人雑誌最優秀賞 第13回 まほろば賞 発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第一三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一九年八月四日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。作品ごとに選考委員から率直鋭利な批評が発せられ、熱い議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただきます。また河林満賞には賞状・賞金五万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と記念品、優秀賞には賞状と賞金三万円・記念メダルを贈らせていただきます。

今回、授賞式は十月十九日に開催される第三回全国同人雑誌会議において行なわれます。どうぞ受賞者、同人誌主

催者、関連同人の方は御出席を賜りますようお願い申し上げます。全国同人雑誌会議は、全国の同人雑誌作家が一堂に集まり、危機に瀕している活字文化をどのようにして盛り上げ復興させていくか、重要な話し合いになります。同人雑誌の方だけでなく、文芸思潮の読者もフリーの立場から参加できます。ぜひたくさんの方が御出席し、活字文化の未来を切り開いて下さるよう、切にお願い申し上げます。

今後とも全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加ください、また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の支持を切に願います。次第です。

この結果また優秀作はインターネットでも発表される予定です。どうぞ御覧いただけましたら幸いです。



## 第13回全国同人雑誌最優秀賞

### まほろば賞

「キリギリス」

〔ぎこん〕21号

中井ひろし

### 特別賞

「坂を上りながら」

〔安藝文学〕87号

石田耕治

### 河林満賞

「スミオ」〔彩雲〕10号

緑町 優

### 読者賞

「サンバイザー」

〔弦〕103号

木戸順子

### 優秀賞

「刑事死す」〔海〕97号

宇梶紀夫

「森で」

〔安藝文学〕87号

武田純子

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」など文芸思潮同人誌団体団体の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ  
1948 大阪生まれ  
早稲田大学文学部卒  
77「僕って何」で芥川賞受賞  
作品はほかに「いちご同盟」  
「空海」「親鸞」など  
日本文藝家協会副理事長  
著作権情報センター理事  
日本点字図書館理事  
武蔵野大学名誉教授

## 昨年を上回る見事な作品

### 三田誠広

この賞の選考を長く続けているが、昨年の候補作のレベルがあまりに高かったため、今年はダメかも知れないと懸念していた。しかしその予想は裏切られ、昨年を上回る見事な候補作が揃うことになった。文芸ジャーナリズムは出版不況を喧伝し、文学の衰退を指摘する声も挙がっているのだが、同人誌のレベルは高く、これからの日本文学は同人誌によって支えられるのではないかとさえ感じられる。満場一致でまほろば賞に選ばれた中井ひろし「キリギリ

がある。そこまで見てくると、前半のゆるい展開も、後半のカタストロフを際立たせるための意図的な構成かとも思えて、この作品も強く推さないわけにはいかなかった。

河林満賞に決まった緑町優「スミオ」は少女とも見紛う美少年と、ケンカに強い少女との美しい恋物語で、現代のメルヘンともいえるべき作品だ。美少年のイメージが鮮烈なものと、成長し変貌していくヒロインの姿を通じて、一途に少年のことを思うヒロインの健気さが強調される。一種のファンタジーなので、リアリティーを求める必要はないのだが、それにしても最後にヒロインが医者になるくだりはお金の話が絡んだりして興が削がれる。これはあらずもがなの成功譚で、少年が亡くなってヒロインが医大進学を決意するというくらいにとどめ、美しい寓話のままで終わった方が印象が強くなるはずだ。

惜しくも賞を逸した作品にも短く言及しておく。木戸順子「サンバイザー」は流産のあとで妊娠恐怖症になった女性の危うい精神状況を描いている。細部をしっかりと押さえた佳品だが、夫が浮気をしていると疑うくだりは、もっと妄想を強調した方が悲劇性が高まるのではないか。宇梶紀夫「刑事死す」は刑事が職務中に死ぬというだけの話。通俗小説に登場する英雄でもなく、純文学にありがちな人生に思い惑う人物でもなく、ごくふつうの刑事の誠実な生き方をとらえた着眼が秀逸だが、テーマとしてはやや地味

ス」は、盲目の女性の一代記だ。短い枚数にもかかわらずヒロインの人生の細部がしっかりと描かれ、度重なる不幸にもめげず前向きに生き続ける人間の強さが、独特の簡素な文体で活写されている。選者の三田は障害者の作文コンクールを選者などを務めているので、この種の作品はいろいろと読んできた。ここに書かれているヒロインの不幸は、とくに際立つほどのものではないのだが、驚いたのは作者の文体の強度だ。叙情を排し、余分な装飾のない文章でテンポよく書き切った文体によって、かえって詩を読むような気分が昂揚を感じ、ヒロインの輝くばかりのひたむきな生き方が目の前にうかがいあがってきた。文学というものの凄味を感じさせる名作に仕上がっている。

特別賞となった石田耕治「坂を上りながら」は、戦後四十年くらい前の広島を歩く人物が描かれている。歩くにつれて過去の断片が少しずつ記憶の中にかがびあがってくる。そうした展開はゆるい随想かとも思わせるのだが、歩いている場所が広島ということで、過去の大きな不幸が予想される。作品はその予想に沿って、原爆で顔が変形した弟の描写に到るのだが、そのあたりの展開が予想を超えるままなまじさで、まさに息を呑むような凄惨な情景となって読者につきつけられる。家族に囲まれて弟が死んでいくシーンや、その前後の超自然的な出来事についても、そういうこともあるかもしれないと納得させるだけのリアリティー

か。武田純子「森で」は古いに頼らないと生きていけない心の弱い女性を描いたもので、現代社会のある側面を衝いている。ただ同じ作者が過去に特別賞を受賞した、ひきこもりの少女を描いた作品のような、文学としてのイメージの美しさが後退しているように思った。



こはま きよし  
1950 沖縄県生まれ  
劇団四季など様々な職を遍歴  
87作家中上健次に師事、マ  
ネージャーを務めるかたわら  
文学修行  
88「風の河」で文学界新人賞を  
受賞  
他の作品に「消える鳥」「後  
生橋」「光の群れ」「火の闇」  
などがある

## 素晴らしい書き手がいる

### 小浜清志

毎年まほろば賞の選考にあたって思うことは素晴らしい書き手が至る所にいるという驚きである。今回も六作品を書かせていただきその感を深くした。

木戸順子「サンバイザー」は妊娠恐怖症に陥った女性の悩みを扱った作品である。何かと理由をつけては夫の要求を避けるようになって一年が経つ。それは離婚の原因にな

ることも理解はしているが、六ヶ月の早産で子を亡くした主人公の闇は深い。しかし、優しく接してくれる夫の寛容も、周りの心づかいもあるがどうしても性生活を拒否してしまう女性心理をたくみに描いている。サンバイザーという小道具の使い方も絶妙である。夫らしき人物と女性がホテルへ入るのをサンバイザー越しに見てしまうエピソードに対して、作者の筆はあまり深入りしないのは不満ではあったが実にうまく仕上がった作品である。

宇梶紀夫「刑事死す」は、ド肝を抜く迫力に充ちた作品である。タイトルからわかる通り刑事の登場する小説であるが、殺人事件の捜査を展開する警察内部のディテールや、犯人を絞りにこんでいく過程は本職の手によるものだろうと思っていた。しかし、まったく異なる人生を歩んでいながらこんな作品が書けるとは実に驚きであった。取材をどのように展開したのかも非常に興味のある所ではあるが、作者の刑事に対するやさしさが主人公の父でもある警官の死までを描いた半生は心打つものがある。きつと作者は刑事に対する憧れがあり、その力がこの小説の熱になっている。同人誌でこのような作品に巡り合えるとは感動である。

緑町優「スミオ」は不思議な作品だった。美少年スミオと男まさりの年上女性かつこの交流で話は進むが、スミオが難病に侵されるあたりからスミオの美しさよりも、かつこの医者志望へとスポットが移動する。スミオの病を治し

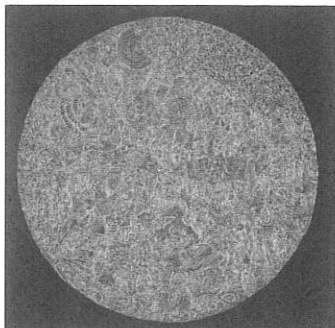
少し勉強を始めようと机に向かっていた。将来を考えると気分が減っていきそうになった、その時だった。突然に周囲が茜色に染まったのだった。そしてピカドンの惨状が展開していくのだが、筆は迫力を持ち読み進むのが苦しくなってくる。被爆した弟の描写は私にとって初めて目にした文章だった。この作品は残さなくてはならないとの思いを強くした。

武田純子「森で」、人生とは選択のくり返しであろう。高校受験、大学進学、就職、結婚、生まれて二、三十年で四つの大きな選択をしなければならぬ。それが日常となれば限りはない。朝起きる、何を食べる、何を着る。出かける道順は？ 人間は何を基準にしてそれらの選択をしているのだろうか。作品の主人公朝井の基準は占いであった。朝のテレビで流れる占い師の言葉に従うのである。指定されたラッキーアイテムをコンビニで手に取る。そして、職場で上司から誘いをうけると友人にタロット占いを頼みその結果を行動に移すという、占いに人生を預けている。会社でウワサが流れる。勤務先が廃止されるという。翌日、正式発表があり、社員の身分は維持するがすべて東京本社へ異動。全員に動揺は広がり、朝井もまた不安に陥り友人にタロット占いを頼む。地元に残るか東京へ行くかを占って欲しいのだが友人は断ってくる。タロットの結果は意図して出せないが、解釈には私見が混じってくるのだ

たいという理由である。ケンカは強かったが勉学はいま一つであったかつこの努力はすさまじい。人間の強さとは明確な目標を持ったときから現れるということを知られる。一度目は受験に失敗するが一浪ののち見事医大に合格。しかし、スミオとの別れが訪れる。あまりにも儂いスミオの死ではあったが、かつこはそれからも努力をつづけて医者として一人立ちする所で物語は終わるが、読み終わってもスミオの美しさが残像となつてしばらく消えなかつた。スミオという美少年と、強くそして美しい生き方のかつこを描いていて清々しい。

石田耕治「坂を上りながら」、旧市立中学校で行われる慰霊祭に横浜から参加するために故郷の広島を訪れた川村は、坂を上りながら過去と向きあう。線路、路地、川沿いの道、橋をわたって足を止める。ゆっくりと過去が甦ってくる。大学を卒業し地元の銀行に勤めたが一年で退職し上京。広島島の惨事をテーマにした作品を書き残したいとの願望をひめて。職をみつめて生活を安定させ脚本家の許で勉強し、数年後にはテレビ局で仕事を始めるようになった過去。そして、昭和二十年八月六日午前八時十五分の記憶が明らかになる。ゆつたりと流れていた筆が急激に動き出します。八月六日の朝早く宿直明けの父が帰り、弟の「行ってきます」という声で川村は起きる。母は妹を連れて出かけていた。川村は工場を休み始めて三日目だった。今日からと告白し、あなたの人生の責任はとれないと断る。朝井は仕方なく本屋で辻占いのページに出会い、辻を探しに店を出て空を見上げるといふ解決方法に気づいてこの作品は終わる。非常に興味深く人間の弱さに光を当てていると感じた。もつと深い所まで光が届けばなおよかっただろう。

中井ひろし「キリギリス」は見事な作品。六歳で失明した女の一生が精緻な筆で描かれている。失明の不幸に始まり、母の自死、盲学校で迎えた戦争。戦後父の食堂を手伝い、結婚相手に出会い、息子を産産した喜びも東の間、父が死に、息子が交通事故死という不幸に見舞われる。夫が家を出て主人公は母の葬儀以来出会ったことのない伯母を頼ることになる。不幸をつみ重ねた小説ではあるが、人間の強さが光って美しい。目が見えなかったことが不幸ではなく心を闇にしたときが不幸だったとの述懐は重い。



火の闇 小浜清志

聖なる地は、汚されたか？

「火の闇」小浜清志 集英社



いがらし つとむ  
1949 山梨県生まれ  
早大文芸科卒  
79「流瀆の島」群像新人長編小説賞  
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長  
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

## 高レベルが揃う

### 五十嵐勉

第十三回まほろば賞には昨年に続いていい作品が揃った。どれが受賞してもおかしくないほどそれぞれの個性が光っていて、同人雑誌の作品のレベルの高さを感じた。質において商業誌以上のものである。たくさんの人に読んでほしい内質を備えていることをあらためて覚えた。

選考は接戦になるのではないかと予想したが、蓋を開けてみると、中井ひろし氏の「キリギリス」が特に高い評価を集めた。この作品は盲目の女性の一生を軸にしているもので、研ぎ澄まされた文章の切れ味が、悲劇への単なる同情に留まらず、絶えず生きる意味への問いかけとして鋭く、冷徹に投げられているところに、逆に哀切を深める結晶を

いと思いついて現代の錯覚の構造を奇妙にダブらせてくることに、この作品の意図しない本質照射がある。強いインパクトを持ち、特別賞となった。

「スミオ」は美しい少年と逞しい少女のおもしろい取り合わせを軸にした、普通は通俗的になりやすい特殊な題材である。これが単に興味に流れずに、発展的な方向を辿るのは、筆者の建設的な姿勢によるものだろう。難病で死ぬスミオへの思いを受けて医学部受験に邁進する主人公の少女の姿は、確かに輝かしいものがあり、スミオが刺繍した遺品の衣装を来てアメリカへ飛ぶラストシーンは美しい。医学部の費用が用意されているなど、どこかうまくいきすぎ、作りすぎの印象を一方では覚えるものの、不思議な感動があることも否定できない。夢に賭ける翼を感じさせる筆致は買うべきものがある。河林満賞受賞は妥当と思えた。

読者賞、木戸順子氏の「サンバイザー」は、氏三度目のノミネート作品である。木戸氏は一作ごとに筆の陰影を深めている。流産のあとに不安に性恐怖症の心理の襞を絡ませて、夫婦の危うさを覗かせながら、大きな帽子を被って町を疾駆する。この陰影をさらに増幅させて、何か別の次元での生命への問いかけや秘密への落下などまで内世界を深化させればさらによかったと思えるが、結末近くになって、インターネットからの言葉や健康の回復によってあっさり元の鞘に戻る安易さが惜しまれる。力のある書き手な

得ている。素材を緊密な筆で緩まずに追い詰めていく彫琢の美しさを感じられた。脚の折れたキリギリスへの愛が生きていることの愛に重なる包んでいく結末は、特に見事で、人生への意味の深い問いかけとなって発光している。選考委員満票の受賞で、これはまほろば賞始まって以来の快挙である。これだけ完成された作品を書く、あとが逆にたいへんで、筆が重くなることも懸念されるが、中井氏にはそれを乗り越えるだけの力量がすでにあると思う。今後の作家としての健筆を期待したい。

特別賞の石田耕治氏の「坂を上りながら」は、原爆小説である。タイトルだけ見ると、何の変哲もない平凡な回顧として書かれているように見えるのだが、四十年以上前の広島自分の家のあったところを再訪するなかに、突然鮮やかに蘇ってくる原爆の記憶が、逆に唐突な異世界の出現を生々しく呼び覚まして、平穏な日常に起こり得る原爆の怖さを想起させる。前半のぬるさが、日常と現代のぬるさにかぶさり、後半の凄まじい現実が、核の現実の凄まじさとぶつかりあって、二つが同時に存在する現代を逆に照射する効果を上げている。被爆して顔がまったく変わってしまった、識別不可能なその人間に、何度も名前を聞き返すシンは、核爆発のリアリティが迫り、恐怖を呼ぶ。このリアリティこそが、核時代のリアリティであることが浮かび上がってくる。時を経て浮上してくるそれは、核爆発が遠

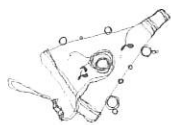
ので、もう一步踏みこたえて、さらに奥へ向かう冒険をあえてしてほしい。安定した力は、「渤海」の山口馨氏と並んで明瞭なので、あともう一作を期待している。

私は個人的には活劇が好きなので、宇梶紀夫氏の「刑事死す」も注目していたが、他の選考委員の支持を得られなかった。殉職した父親の「警察官には絶対になるな」という遺言に叛いてなった刑事の最期が躍動的に描かれている。拳銃殺人事件を追い、犯人を追いつめていく過程は、警察の内部を経験しているようなりアリティがあり、迫真の緊張感を醸してくる。ラストは犯人の拳銃で顎を撃ち抜かれて死ぬのだが、この壮絶な現場の生死の瞬間は、圧倒的なクライマックスを見せる。私はこの作品を買う。しかし、できるならば、事件ものとしての激烈な進行感に沿って、人間を描く筆がほしい。主人公の内面——残す家族のことや、残された母親のことや、命を失うかもしれない不安など、人間としてのやわらかな部分が死と隣り合わせのものとして浮かび上がるように書けば、もっと奥行きが深められただろう。純文学の立場からの刑事ものはあまり例を見ない。その新しい領域にぜひチャレンジしてもらいたい。

武田純子氏の「森で」は、占いに自分を委ねていた現代の彷徨いの生活の中に、新たな指針を見出すストーリーである。武田氏の筆は、現代的混沌の中にクリアな基軸を発見していく基本的な構造を有しているが、以前の「沈む

町」のほうがスケールが大きく、何でも包み込んでしまう多様性と広がりがあった。今回もそれに似た構造は有しているものの、やはり小市民的な小ささは否めない。ただ、どんな形でもそれなりにおもしろく読める筆力はあらためて示してもらえ、技量の確かさは太鼓判と言っている。あとはここにある問題をどこまで現代としての普遍的な課題に拡大できるか、その意識を持つことだろう。「古い」では引きこもりはそこに載せられても、核の問題や都市文明の問題などは載せられない。しかし「霧」ならば、核も載せられるし、都市の大きな問題も載せられる。近所のおばあちゃんの意識も生活も載せられるのである。果敢に大きなものに立ち向かってほしい。

同人雑誌の中の誠実な、真剣な筆を信じている。その作品の存在は、けっしてその同人雑誌の中だけに留まるものではなくて、その存在がすべての同人雑誌や表現行為を支え、創造の営為を真底からのエネルギーとして自ら発熱し、屹立しているという絶対的な認識を持ってほしい。優れた作品は、それが読まれても読まれなくても、存在そのものとして人間を下から支えるものであることが、文学と創造の所以だろう。



代までの一歩一歩を、肉親の死、差別、時代や社会の波に苦しみながらも生き抜いていく様子が綴られている。だが、書き手が読者に期待しているのは憐れみの視線ではない。肉体の制限を超えたところで光を放つ美しい風景。キヨにとつての光は、まだ目が見えていた幼い頃の記憶の海の青である。この色だけは、どんな不幸が起ころうとも、彼女を裏切らない。疎遠にしていた伯母と再会して得た全体の仕事で生計を立てるようになると、客との会話が光になった。秋の夜寂しくなると、料理をしながら父との会話を思い出す。懐かしい記憶も光だった。そうしてキヨは、息子と声がつくりな少年と出会う。強盗に入りキリギリスを置いて逃げていった少年への同情はやがて失ったわが子への思いと重なっていく。キヨはキリギリスの籠を抱いて寝て、生活を共にする。なぜなら、触覚の感覚で生きていくキリギリスは、彼女自身だからだ。キリギリスのちぎれた足が糞の中に入っていたという記載は、彼女が自ら糞に触れて掃除をしていた、すなわち盲目の身で生きてきたことそのものの壮絶さを伝えているの言うまでもない。同時に、それでも、命がある限り光を求めらるのだということも。なぜなら、もう一度息子の声が聴きたくて、キヨはキリギリスを大事にする。息子は「母」のもとに戻ると信じることも、光だった。心のひだにまで静かに差し込んでくるその光を、読者もきつと感じるに違いない。



## 生々しさへの共鳴

### 中上紀

長い梅雨が明けたとたん、エアコンなしでは息も出来ないほどの熱波に見舞われた八月の初め、第十三回「まほろば賞」の選考会が行われた。だが、私の胸に暑い何かが沸き起こる気がしたのは、気温のせいではない。文学というものに真摯な書き手たちの研ぎ澄まされた筆で綴られた選りすぐりの候補作品とその思い、響いてくる生々しい魂の叫びに、売れ行きばかりが重視される昨今の出版事情の中で冷え切っていた心が共鳴したのだ。

中井ひろし氏の「キリギリス」は満場一致、満点で「まほろば賞」受賞となった。盲目の女性キヨが、大正から現在「特別賞」受賞となったのは石田耕治氏の「坂を上がりがら」だ。そこに漲るのは著者自身が体験した原爆という負の力である。記憶に導かれ、主人公川村は、広島を訪れる。だが、列車を降り、無人の踏切に差し掛かった時蘇ってきたのは家族の生々しい思い出だった。さらには、かつて平和だった頃の静かな街並み。近所の人々の懐かしい顔。それらすべてを、原子爆弾が打ち砕いてしまったのだと、戦争から遠い現代に生きる読者に突き付けるように、悲惨な記憶が幻影として挟み込まれる。川村は建物疎開作業に出っていた弟を原爆で失った。

——そのとき、列の中から一人、人間ではない顔が出てきた。

弟だと確認するのに、辛うじて焼けずに残っていたベルトで判断しなければならなかったほどの、ひどいやけどだった。家に連れ帰り、皆で弟の世話をしたが、助からなかった。遺体の喉から空気が出たときの音が、「おおかあさん」と聞こえ、母が泣き叫んだ場面は、何度読んでも涙が出る。この作品はフィクションの形を取っているが、まぎれもない事実であるとも言える。主人公が体験したことと似たことが、幾千幾万もの幸せな家庭で起きていたのだから。その夜、彼方の山々のあちこちから、たくさんの火の玉が天に昇っていく様子を、川村は見る。恐ろしい光景である。だが、描写は美しい。美しいからこそ、余計に「お

## 全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

### ●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

### ●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。最優秀賞「まほろば賞」には賞金10万円と賞状・記念品を、優秀賞には賞金2万円と賞状・記念品を贈る。（賞金は、できる限り有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）
- ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞「まほろば賞」その他を決定する。
- ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
- ④ 次点には特別賞を授与する。特別賞賞金5万円および賞状・記念品を贈る。
- ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。五十嵐勉賞など。
- ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
- ⑦ 読者賞の投票は極力選考会までに行う。
- ⑧ 河林満賞は賞金5万円と賞状・記念品を贈る。
- ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
- ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- ⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。

●この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切に願います。

2015年6月24日（改訂）

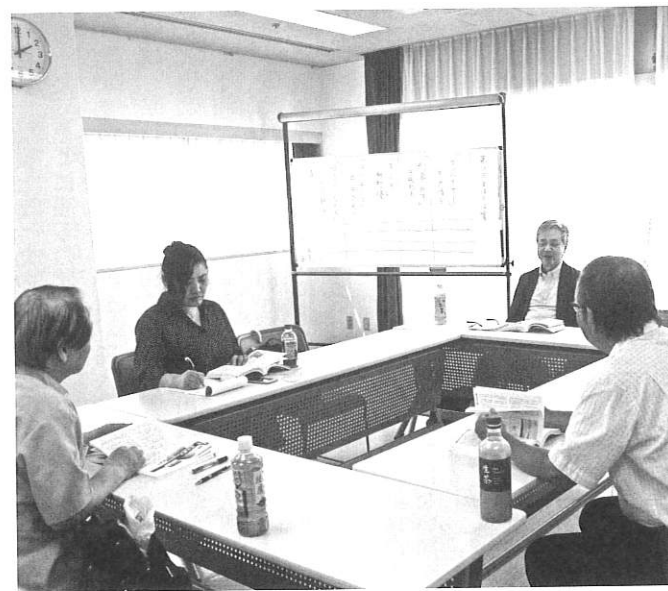
全国同人雑誌振興会  
文芸思潮

ぞましい」。ずっと語り継ぎたい、残していくべき小説である。

「河林満賞」を受賞したのは、緑町優氏の「スミオ」だ。喧嘩の強い「あたし」かつこは、一つ下の美少年スミオが気に入り、女装させて遊んでいた。かつこはスミオの美しさ、スミオはかつこの強さに憧れていた。だが、スミオは難しい病気を抱えており、年齢を重ねることに弱っていく。中学生になり、昔女装させて外を歩かせたことを謝るかつこに、スミオは、自分は「自由に歩いてたんだ」と話す。そして、その「自由」を、化粧をし、母の赤いワンピースを来て病院内を歩くことで、再び叶えた。その、儂い命の灯の最後の輝きは、涙を誘う部分である。スミオは亡くなる。だが、物語は悲劇で終わるのではなく、かつこが「次の百人の」スミオを助けるために医者への道を進むというその後の展開が、前向きな未来を読者に提示する。また、男勝りだったかつこだが、スミオの手刺繍の花があらわれたブラウスを纏うと、いつの間にか似合うようになっていくことに気付くといった、一人の女性の青春物語としての要素も見逃せない。読み終わったあと、胸がいっぱいになっていく自分に気付いた。

どの作品も本当に素晴らしかった。木戸順子氏の「サンバイザー」は、夫に触れられたくない妊娠恐怖症を扱った作品であった。共感する読者が多そうだ。武田順子氏の

「森で」は、自由であり、無数の選択肢があるがゆえ、より良い未来を求めすぎて占いにばかり頼ってしまう現代女性の影の部分が描かれる。宇梶紀夫氏の「刑事死す」は、父親の「獅子になれ」という言葉に翻弄される刑事の物語だ。走り抜けるような展開に、映像が生き生きと浮かんできた。



まほろば賞選考会風景 2019.8.4 大田区民プラザ会議室で

2019 第13回  
全国同人雑誌最優秀賞



まほろば賞

選考委員

三田誠広・中上 紀  
小浜清志・五十嵐勉

※候補作6篇「文芸思潮」72号に掲載



読者賞投票もあります●詳細は次ページを御覧下さい。

新しい日本文学の潮流を

同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞



## 全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

### ●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

### ●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。最優秀賞「まほろば賞」には賞金10万円と賞状・記念品を、優秀賞には賞金2万円と賞状・記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）
- ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞「まほろば賞」その他を決定する。
- ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
- ④ 次点には特別賞を授与する。特別賞賞金5万円および賞状・記念品を贈る。
- ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。五十嵐勉賞など。
- ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
- ⑦ 読者賞の投票は極力選考会までに行う。
- ⑧ 河林満賞は賞金5万円と賞状・記念品を贈る。
- ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
- ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- ⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。

●この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切にお願いするしだいです。

2015年6月24日（改訂）

全国同人雑誌振興会  
文芸思潮



# 読者賞



新しい日本文学の潮流を  
同人雑誌から

全国同人雑誌最優秀賞  
まほろば賞

## 第13回全国同人雑誌まほろば賞 読者賞 投票用紙

① 「サンバイザー」 木戸順子「弦」103号	② 「刑事死す」 宇梶紀夫「海」97号	③ 「スミオ」 緑町 優「彩雲」10号	④ 「キリギリス」 中井ひろし「ザイン」21号	⑤ 「坂を上りながら」 石田耕治「安藝文学」87号	⑥ 「森で」 武田純子「安藝文学」87号
点	点	点	点	点	点
持ち点 ●金額の 1/100		氏名		TEL	
住所 〒			文芸思潮定期購読の方は○をご記入下さい 同人雑誌振興会会員の方は○をご記入下さい		

※1口1000円からですので、2000円の方の持ち点は20点となります。50口5万円まで可能です。●送り先 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社 まほろば賞読者賞係（今年度から上限を5万円に増やしました）



## サンバイザー

木戸順子

\*

何かと理由をつけては夫の要求を避けるようになって、一年が経つ。このことは誰も知らないはずだった。しかしこの頃、どこからか時々妙な声が聞こえてくるようになった。そんなこと、いつまで続くと思っているの。夫の身にもなつてごらん。気のせいかもしれない。周りが静かで、一人きりのときにそれは多かった。本当に気の毒なのは夫に違いないのだが、この点については自分もある意味では被害者なのではないか。言葉だけではなく、映画のシーンのようにリアルな人影が見えることもまれにあった。責め

られていたような、追い詰められているような気がする。夕べも断つた。夫が勤めに出かけた後、食事の片付けもしないで、ぼんやりと椅子にかけたままにいる。七月、夏の太陽はすでに高い位置から容赦なくリビングに侵入してきた。夫はいつも、特に夜は気味が悪いほど優しい。誘われると、一応夫のベッドに入る。時に初めから断ることもあった。

「夏休みが取れたら、また海に行こうか」  
わたしは返事をしない。夫の手の動きが気になっている。「去年、初めて夜光虫を見ただろう。あんなに青白く細い帯のような光が波打ち際で揺れるなんて、びっくりだった」  
本当にそうだった。波に縫い付けられた青いレース。今

でも鮮やかに思い出すことが出来る。

「去年と同じホテルに泊まるか、全然違う海に行くか。」

日本海はどう？ お盆前に三泊四日なら大丈夫だよ」

会社で分散休暇の計画を立てないといけなのだろう。海が好きなたしに気を使っている。

「そうねえ」

曖昧に答えるが、多分夫はこれを承諾と解釈するはずだ。

「これも去年だったよね。鳥が魚を狙って空から落ちてくるように海に突っ込んだこと、覚えていない？」

すごいスピードで小さな体が垂直になり、海へ吸い込まれていった。あんなに高いところから水中の魚が見えるとは、鳥の視力はどれくらいなのだろうか。夫が楽しかった思い出やこれからの計画を話すのは、わたしをリラックスさせようとしているのだと痛いほどわかつている。いつかは元のようにうまくいく日が来ると思っているのだ。申し訳ないのだが、その努力とは正反対の現象が起こる。わたしの体の全ての部分は極度に緊張し、受け入れることが困難になる。三年間の結婚生活で、最近の一年間は一度も性生活はない。

「ごめんなさい」

いつものわたしの精一杯の断りの言葉は、小さな声になる。これを合図に隣のベッドへ移動する。四十歳の夫の体の要求を知らないわけではない。怒鳴るわけでもなく、暴

力を振るうわけでもない夫が、しばらく寝付けない様子を全身で感じながら、夕べも布団の中で身じろぎもしなかった。

どうしよう。やはり医者に相談した方がいいだろうかと思っていると、チャイムが鳴った。インターフォンのカメラに若い男性が映っている。

「交番の者です」

出てみると、

「驚かせてすみません」

人懐こい笑顔の警官が、胸に下げたネームプレートを差し出して立っていた。

「昨日、この辺りに不審者が出ました。用心のために一応各ご家庭を訪問しているんです」

初耳だった。

「被害の届けはないのですが、子供達を追い回していたらしいのです。その様子が防犯カメラに映っていました。まだ男の特定には至っていませんが」

この辺りは静かな住宅街である。三十二歳で結婚したとき、二人の貯金を頭金にして建て売り住宅を買った。住み始めて以来三年、全く平和な町だった。何か気が付かれたことがあったら連絡してくださいと言いつつ、彼は急ぎ足で帰って行った。

一日おきに週三回、夫の友達の経営する喫茶店を手伝

ている。十一時から三時。ランチの準備から始めて、その片付けが終わる時間帯だった。これもそろそろ一年になる。結婚する前に働いていたような忙しい仕事に戻ることは、もはや苦痛だった。子供もいないことだし気分転換にどうかと、友達に頼まれた夫が言い出して通い始めた。都心に近い便利な場所にありながら駐車場を完備したその店は、ここ二、三年客足が急速に伸びてきていた。その友達夫婦には自分たちの結婚式にも出席してもらっていたし、時々二人でコーヒーを飲みに出かけたこともある。実際、おいしいコーヒーを出す。小さい子供が二人いて、保育園に通っている。住居になっている二階には外階段が付いているので、滅多に顔を会わせないことがわかっていて好都合だった。しかし、今日は休みの日である。

ざっと家事を済ませて、午後、駅前に出来た新しいビルの見学に出かけた。昼間の地下鉄は比較的空いている。途中からセーラー服の女子生徒が数人乗り込んできた。ドア付近でおしゃべりを始める。わたしの座っている前に一つ座席が空いている。彼女達のうちの一人がざっとその席に座ると、スマホを取り出した。目の大きい、チャームिंगな子である。何か調べたかったのか、それとも急ぎのメールかラインか。三駅を過ぎるころまで、彼女は下を向いたまま指を動かしている。わたしの前の座席には六人が座っているが、そのうち五人はスマホを操作している。彼女の

ブを描いている、五島列島の浜辺。近くには林があるだけで、その写真の中に人家は見当たらない。この本を買って帰ったら、夫は喜ぶだろう。日頃我慢を強いているのだから、これくらいのサービスはした方がいいかもしれない。夕食の後できつと話が盛り上がり、仲のよい夫婦の時間が持てるだろう。

結局、その本を一冊買っただけで家に向かった。地下鉄を降りてすぐ、十分ほど歩かなければならない。四時になっても太陽のエネルギーはすさまじく、日傘を持って来なかったことを後悔した。家に向かうあまり広くはない道路を、こちらに向かつて一台の自転車がゆっくり走ってきた。わたしは道路の右側。相手は左側。ぶつかるとは思えないのだが、自転車が近づくにつれて落ち着かなくなってきた。その女性は、見たこともないような大きなサンバイザーを着けていた。目深にかぶったそれは多分プラスチック製で、ほとんど顔を覆い隠すほどの大きさだった。その上、濃いコーヒーのような色をしている。目を凝らしても、彼女の目鼻立ちは外からは全く識別できない。わたしは危険を感じ、さらに道路の端に寄った。

「こんにちは。お出かけだったの？」  
どこかで聞いたことのある声だった。  
「大丈夫よ。ちゃんと見えてるから。そんなによけなくても」

両隣の男性も例外ではない。何気なく観察していると、彼女は自分の画面を見ているような顔をして、目は左側の男性のスマホに釘付けになっている。丸い目をさらに大きくし、眼球を出来るだけ左に寄せて。彼もまた操作に夢中である。彼女の長い黒髪がまるでカーテンのようだ。あれなら多分、膝の上で操作している彼のスマホを相手に気付かずに難なく盗み見できるだろう。一体彼女はどんな画面に引きつけられているのだろうかというわたしの最初の興味は、すぐに気味の悪さに変わっていった。どこで誰に何を見られているのかわからないのだ。わたしの降りる駅が近づいたが、彼女の見開いた目は元に戻りそうにもない。可愛いと思った最初の印象とは全く別人の顔だった。

その新しいビルは、どこから人が湧き出てくるかと思うほどの混雑ぶりだった。特にレストラン街は、昼食には遅い時間帯なのに多くの女性客が列をなしている。早めに軽く食べて来てよかったと思いつつ、人とぶつからないように気を付けて大きな書店のあるフロアにたどり着いた。冷房がよく効いている。

しばらくして、「この夏、オススメの海」という本を見つけた。パラパラとめくってみる。エメラルドグリーンのも、美しいとしか形容のしようがない沖繩の小さな島の海が目飛び込んできた。沖繩にはまだ行ったことがない。続いて目に留まったのは、真っ白な砂浜がゆつたりとしたカー

笑いながら彼女は続ける。

「私よ。アリムラよ」

自転車はその声を残したまま走り去った。振り返るだけで、声を掛けるタイミングを失った。近所の人なら顔は知っている。とりわけ彼女とは年が近いこともあって、仲のよい方だった。あのサンバイザーを着けていると、こちらからは全然わからない。それが日焼け防止のためだとわかっている、何となくいつまでも心が落ち着かなかった。

\*\*\*

その夜、なかなか寝付かれなかった。眠らなくてはと思えば思うほど、目が冴えてくる。最近はず月に三、四回、それも夫の帰りが遅い日によく起こった。先に寝ているんだよ。今朝も玄関でいつものように言った。日頃は大体定時に帰るが、商社というところは、時に猛烈に忙しい。自分も同じ会社で働いていたからよくわかっていった。七時ごろ、テレビを見ながらいつもより二時間も早い夕食を終わる。仕事の後は同僚と少しビールを飲むから遅くなると聞かされてくる。今日もきつと十二時は過ぎるだろう。以前は、いつ帰ったかも知らずに熟睡できていた。そういう夜は、夫に誘われることはないという無意識の安心感があつたのかも。もしれない。

思い切つて電気をつけた。急に明るくなった天井に、何やらうごめく物が見える。そこには何枚もの正方形の杉板が張られていて、この家を最初に見に来た日にとても気に入ったのだ。大小の木の節が、夜空の星のように見えた。ところが今、それが黒い生き物となつてもぞもぞと動いている。たくさんのリング形の物は体を少しづつ伸ばし始め、見る見るうちに細いミミズのような形になつた。気のせいだと思い直し、目が明るさに十分慣れていないだけなのだと言ひ聞かせる。リモコンでいったんライトを消してみる。何だつたんだらう。余計気になつて眠るどころではなくなつた。もう一度ライトをつけると、小さな細長い虫は一か所にどンドン集まつていた。その数はあまりにも多く、数えることもできない。すると、カマキリの幼虫がかえるときのように数珠つなぎになつてスピードを上げ、わたしの下腹部をめぐり下りてくる。急いで電気を消すと、涙が滲んだ。

自分の体も心もいつの間にか病に侵されてしまつたのだろうか。あの広い書店の数えきれないほどの書物の中で、偶然わたしの目に留まつた二冊の本。「妊娠恐怖症」それはもう約束された出会いとしか思われなかつた。一瞬体が凍りついたが、手に取る勇氣はなかつた。こういう病気があると初めて知り、自分のことなのだと思ひついたのだ。妊娠恐怖症には二つのタイプがある。一つは流産、ある

いは早産を経験して子供の命を亡くしたことにより、もう二度と妊娠したくないという強い思いを持つてしまうこと。もう一つは、出産の痛みや苦しみが余りにも激しく、もう妊娠したくないと考えること。心のどこかでは子供を望んでいても、精神と肉体が完全に乖離してしまふ。

夕食後、インターネットで探し当てた知識だつた。さらに、人によつて多少の差異はあるが、避妊具を使つても何かのはずみで妊娠してしまうのではないかという不安から逃れられない人もいると書かれていた。また、それが高じて気持ちが悪れ、精神的な問題に発展することもあるらしい。心療内科を受診して治療できる場合もあると結ばれていた。

わたしの場合は、はつきり前者に該当する。妊娠に恐れを抱く気持ちは皮膚感覚として共有できた。せつかく宿つた命をまた失うことになるかもしれない。二度も悪夢を経験することには、耐えられなかつた。その不安でわたしの体は縮こまつてしまふとしか思えなかつた。夫の優しさは、一年前のそのわたしの辛さを十分理解してくれていることの証拠だつた。その愛情にどうしたら応えられるだろうと悩み続けているが、何とも出来ない。

六か月の早産で、女の子だつた。保育器に入れられ手厚い看護を受けたが、生き延びることはかなわなかつた。医者は原因と思われるいくつかについて説明してくれた。わ

たしはそれを整理し、理解し、記憶する状態ではなかつた。不幸の細部などむしろ知りたくなかつた。これほど医学が進んでいても、この子の命を救うことはできなかつた。すねと夫は声を落として言つた。申し訳ありません。万全を尽くしましたが。次の機会という希望を持ってください。まだお二人はお若いのです。

結局これがこの子の運命だつたと思うことで自分を慰め、時間という薬に癒されていくのを待つしかなかつた。顔も手足も何もかも人間そのものの自分の子。見てしまつたことが罪だつたのかもしれない。もつと早い時期に流産していればこんな気持ちにならなかつたかもしれない。自分を責め続けて、しばらくは死んだような日々を送つたのだ。自分の何がいけないなかつたのか。気を付けて生活し、大事に守つてきたのだ。

玄関の開く音がして夫が帰つてきた。今日は、シャワーを済ませて寝室へ上がってくる足音までもが、わたしを責めているように聞こえる。布団をかぶつて寝ているふりをするしかなかつた。

月曜日は仕事の日だつた。いつものように忙しく接客に追われた。日替わりランチメニューの評判がよく、昼食目的の客の波が引くのは二時を過ぎる。料理の担当はチーフである夫の友達ともう一人のアルバイトの若い男性。ホールは、開業の時からずっと働いている中年の女性とこれも

パートの若い主婦。私が休みの時、忙しければ友達のおさきが働か仕組みになつてくれる。片付けが終わる頃、調理場の隅で順番に遅い昼食を食べる。さすがに二時半になると、店内は静かになる。

「ちょっと、これ、二階に持つて行って貰えないかな」  
突然、チーフがラップをかけた皿を私に渡した。

「下の子が昨日から風邪だね。今日は大分いいんだけど、保育園を休んでる。二人のランチ。悪いね」

わたしが二階に行くことは滅多にない。今まで数回上がったことはあるが、いつも子供のいないときだつた。勤務時間内だから断る理由はない。

部屋へ入ると、彼女はもう待つていた。  
「下から電話があつたのよ。まあ、上がつてちょうだい。少しくらいいいでしょ」

「もう子供さんの風邪はだいじょうぶですか」  
ソファに座っている元気そうな女の子が、開け放たれたドアの奥に見えた。可愛いピンクの花柄の洋服を着せられて、お人形のように見える。

「もうすっかりいいんだけど、人にうつるといけないから用心して休ませたの。お腹が空いたと言うもんだから、こんな時間に食べるのよ」

彼女は手際よく食卓に小皿と箸とスプーンを並べ、子供の椅子に娘を座らせた。

「もうすぐ三歳なの。名前はユミ。一人で上手に食べるわ。ご挨拶は？」

人見知りしない子のようで、にっこり笑ってこんにちはと、元氣よく言った。

「食後のコーヒーはどうかしら」

言いながら、わたしの前にすぐコーヒーが置かれた。既に用意されていたとしか思えない。鮭のムニエルとポテトサラダ。玉ねぎと人参とキャベツのマリネ。ランチメニューと同じだった。何を話したらいいのだろう。ひとまずコーヒーを一口飲む。目はいやでもユミに注がれる。綿のピンクのワンピースの袖からぼちやりとした腕を出して、小さなスプーンでポテトサラダを口に運びながらじつとわたしを見ている。

襟には白いレース。髪は茶色つぼくて肩まで。少しくせ毛かもしれない。小さな女の子を側でじつと観察するのは初めてだった。時々道ですれ違っても、注視するのをずっと避けてきた。しかし、何という可憐さ。丸いほっぺた。彫刻をほどこされたような、くつきりとした二つの透きとおった目。可愛いわね。そう言いたいのに、素直に言葉が出てこない。スプーンにミニトマトを一つ載せると、ユミはどうぞと言ってわたしに差し出した。ありがとう。手のひらにそれを受けるとき、わたしの手はユミの白い腕に触れた。生きている子供はこんなに柔らかいのだ。複雑な感

情が次から次へと押し寄せる。

「なるべく小さい子と接した方がいいって言うわよ」

それまで一言もしゃべらなかつた奥さんが、ムニエルをナイフでカットしながら、思い切つたようにわたしに話しかけた。

「辛かつたでしょう。ごめんね、こんなこと言い出して。

でも、子供はとても可愛い。あなたのためにもご主人のためにも幸せな日が来ることを、私達、祈っているのよ」

わたしの早産は知らされていたということだ。それ以後のことはともかくとして。

「ありがとうございます」

それだけ言うのが精一杯だった。

\*\*\*

ヤギのチーズがあつたから買ったよ。他に何かつまみになるような物をみつくろっていいか。夫から電話があつた。地下鉄の駅の近くにコンビニがあつて、なかなか品揃えがいい。土曜日、珍しく夕方早い時間に仕事が終わつたらしい。ビールが好きな夫のために、これだけは切らさないでいる。少しは飲めるので、わたしも夕食時にはいつも付き合う。夫はワインも好きなのだが、わたしはあまり関心がない。気が向くと今日のように自分で買ってくるこ

がたまにあつた。

今晩は鯛の刺身にしようと思つて準備していたが、それを急いでカルパッチョ風に仕上げた。スープはコンソメ。インスタントだが、意外においしい。主食はトマトスパゲティ。これはその時の気分だ。

まだ明るいうちから、久しぶりのゆつくりした夕食が始まつた。わたしは、勤めていたときによく着ていた少し上等のワンピースに着替えた。これを着て何度も食事に行つたものだが、夫は忘れていたかもしれない。最初はビールで乾杯。真っ白なヤギのチーズは初めて食べる。案外さっぱりしていて、意外にビールにも合う。夫のいいところは食べ物の好き嫌いがなくて、体の大きい分食欲も旺盛だった。作つた物を残さずにどんどん食べる様子を見てみると、こちらも元氣な気持ちになつてついつい食べてしまう。結婚という幸福を心から感じる時間だった。

「コンビニから家まで結構時間がかつたわね。お蔭でご飯の準備ができたけど」

ワインに切り替えていた夫は、顔が赤くなっている。

「それがね、変なことが起こっていてさ、コンビニで。二人いる店員のうちの男の人がずっと一人の客と話しているもんだから、カウンターの前に列ができちゃって待たされた」

夫の話によると、中年の男の客がコンビニの棚の針金に

自分のシャツの肩の辺を引っかけたというのだ。かなり大声で怒っていたので、店内は静まり返つた。店員がその場所を確認すると、確かに針金が少し突き出ている。

「それでどうなったの」

「それがね、どうなったと思う？ 驚いちゃつたよ。悪いことは出来ないもんだね」

店員はすぐに、店の入り口と店内にある防犯カメラの映像を点検したらしい。奥の部屋へその男を連れて行つた。

しばらくして、その男は観念したような顔をして出てきた。見ず知らずの客同士が、急にあちこちで話し始めた。きつとカメラに映っていたんだよ。テレビで言つてたけど、防犯カメラのお蔭で万引きが減つたらしいよ。多分、棚のところで破れたというわけではなかつたんだね。言いがかりだろう。入り口のカメラに、もしかしたらすでに破れた上着が映つていたりして。口々に小声で推理を始めて、どうやらそういう結論に達したのだった。

「勿論、店員は何も言わなかつたよ。でも、僕もきつとそうだと思う」

わたしは、数日前に警官が訪ねてきたことを話した。夫はふーんと言つてから、

「町の安全がそれで守られるなら、いいんじゃないか。道路に設置されたカメラのお蔭で、犯人を特定した例をテレビでもよく報道しているだろう」

夫はあくまでも肯定的である。防犯カメラとはいうものの、結局それは監視カメラではないかという困惑が残った。町の通りには、一体どこにいくつの防犯カメラが設置されているのだろうか。サンバイザーとコンビニの話が混ざり合って、心の底に得体の知れない気味の悪さが蓄積された。「わたしもワインを少し飲んでみようかな」その気分を振り払うように、ワイングラスを夫に差し出す。

「やっぱり、ヤギのチーズはワインの方がよく合うよ」夫は上機嫌だった。

「ところで、店の方はどうなの。昨日、行ったよね」

「変わらないわよ。いつも通り働いてる」

わたしがユミちゃんと接触したことを確認しようとしているのだと、直感した。夫と友達夫婦の善意を悪意と受け取るわたしは、常軌を逸しているのだろうか。

「ねえ、このワンピース、覚えてるの？」

また、話題を変える。

「知ってるよ。僕もこの服、好きだ。よく似合う」

酔った夫は立ち上がってわたしの手を取り、抱き寄せた。「君こそ覚えているかな。この服を着ていたとき、結婚する前だったよね、初めてホテルへ行ったんだよ」

忘れるはずがなかった。ワインの分だけいつもより酔いがまわったわたしは、夫の背に回した手に力を込めた。こ

れで罪滅ぼしになるなら、どんなに気が休まるだろう。夫はそんなわたしにキスを繰り返した。

今日のように酔ったときの方が話しやすいかもしれない。わたしは、ここしばらく考えていたことを思い切って夫に伝えようと心に決めた。

「あなたが子供好きだということはよくわかっているのよ。妊娠したときの喜びようを見れば。それなのに本当に悪いと思っているわ」

座り直した夫は、グラスに残っているワインを飲み干した。

「理屈では分かっているけど、どうしようもできないの。不安ばかりが押し寄せて」

打って変わって急速に重苦しい雰囲気になる。子供が大病院で死んだときのことを忘れたことはない。女の子だとわかっていて、既にサエという名前を二人で付けていたのだが、夫はその子を霊安室から即、直葬にするという方法を選んだ。半狂乱になっているわたしに相談するのは無理だと判断したのだろう。それでよかったと、今では思っている。何本かの管を付けられて、わずかに胸を上下させていた保育器の中のわが子をわたしは一度見ただけだった。小さな棺の中で、これも用意していた純白の産着に埋もれていたに違いない。見送りには、夫とわたしの両親が付き添ったと聞いている。夫の実家は遠く離れていて、知らせ

なかったらしい。未練が残らないようにと考えた末のことだから、決して恨んではいけないよと、母は何度もわたしに言い含めた。お骨も写真も何も存在しない。まだお腹にいたときの弱々しい胎動の記憶と、土色をした小さな顔だけが私に残された全てだった。

「ね、どうしても子供がほしいのなら、生まれたばかりの子を貰ってくるというのはどう？」

夫は怖い顔で私を睨んだ。

「可愛がって、きちんと育てるから、わたし」

「そんなことを考える暇があったら、一度病院へ行つてきたらどうなんだ。その方が先だと思っただけ」

誰が考えても、それが正論だった。ユミちゃん、抱っこしてもらおう？ あのととき、奥さんのその言葉にわたしはひるんだ。友達の子も抱けない今の状況で、果たして人の子を育てることが出来るのだろうか。それとも、自分が生まなくていい分、気が楽なのではないかとも思う。

「とにかくもう少し待ってみよう。時間が経てば、気持ちも変わってくるかもしれないし」

「もし、うまくいかなかったら？」

「そのときは、また考えればいい」

外がずいぶん暗くなってきた。わたしは立ち上がって、壁のライトだけをつけた。オレンジ色の弱い光の中で、わたしは立ったまま後ろから手を回して、座っている夫を椅

子ごと抱いた。自分の顔を夫の顔にすり寄せる。言わねばならないことがもう一つあった。勇気を出して耳元でささやくように言う。夫は何の反応も見せなかった。聞こえないはずはなかったが、聞こえないふりをしたのかもしれない。

それからわたしは、トマトスパゲティを作った。いつもの遅い夕食の時間帯になり、テレビを見ながら夫はおいしいを連発しながら食べる。わたしは、自分のスパゲティの半分を彼の皿に移した。

洗い物をしながら、久しぶりに母に会いたくなった。初孫を失った悲しみを忘れたかのように、次の子の誕生を願う悪気のない一言を聞いてしまつてから、足が遠のいている。両親も気を使つてか、遊びにも来ない。まだ独身の妹と三人で暮らしている。もう一年も経つたのだから、あまり心配をかけてはいけないのだ。思い切つて夫に自分の思いを伝えたいか、少しは気が軽くなっている。明日の日曜日、夫がいいと言えば二人で実家へ行きたくなくなった。

翌日、結局わたしは、一人で出かけた。夫は会社の友達と遊ぶ約束があるようだった。地下鉄の終点で、郊外へのバスに乗り換える。日曜日ということもあって、次のバスまでしばらく待たなければならなかった。外は暑いので、バスターミナルの中に入った。ガラス越しに、外を歩き交う人の群れを眺める。友達同士。夫婦連れ。小さな子を連

れた家族。

子供のいない夫婦だつてたくさんいるんだよ。君がそんなに苦しんでいるんなら、いいんだよ。いなければいいように、二人の生活を楽しむという生き方をすればいい。昨夜、ベッドの中で夫はそう言った。何も性行為だけが夫婦の愛情だというものではないと、僕は思っている。そんなに自分を責めなくていいから。

何という慈悲に溢れた言葉だと、単純には喜べない。優しさは時として人を傷つける。子供については一応の妥協点は達したかもしれないが、夫自身の満足感という重要な問題が残ったままだった。

バスが来るのが見える。乗ってしまえば三十分。母は多分待っているだろう。けれどもわたしは、地下鉄の駅へ続く階段の方へ歩き出した。会えば、母の存在もわたしの心の負担をさらに増大させることになってしまうとも限らない。

\*\*\*

わたしは大きなサンバイザーを着けて、町のあちこちを行事もないのに自転車で走り回るようになった。プラスチック製のひさし越しに見える風景は、着色されているだけで、視界には何の問題もない。人も車もビルも、標識の

文字さえそこにある通りに見えた。いつかアリムラの言っていた通りだった。それぞれの動きにも異常はない。ただ時々わたしの方を見て、怪訝そうな顔をする人が何人かいた。わたしが最初のときに感じた、目線が合わないことによる違和感に違いない。わたしの方からは相手の顔がはっきり見える。洋服の模様も見える。わずかに茶色っぽく見える点を除いて。何人か知っている町内の人を見かけたが、すれ違つても声を掛けてくる人はいない。奇妙なことに、これが不思議な安心感を与えた。

仕事が終わる土曜日、単なる気分転換で遠出をした。夕方、八月も終わりというのに、日差しは依然として厳しい。黒くて薄い、上腕部まで隠れる手袋をはめた。夏用の涼しいパンツをはいた。余計に誰だかわからなくなった。隣の区を横切り、次の区まで走る。初めての場所がよく地理がわからず、繁華街の狭い道に入り込んでしまった。向こうからやって来る二人連れが目留まった途端、息を呑んだ。思わずブレーキを掛けたが、相手は気付かないはずだと思ひ直し、冷静にゆっくりペダルを漕いだ。知らない女と楽しそうに話しながらこちらに近づいてくる男は、夫だった。見間違ふとは考えられなかった。女はどうも年上のように見えるが、正確にはわからない。すれ違つてからすぐに、わたしは彼らの後を追った。細い路地を二度曲がって、二人は洒落た三階建ての建物に吸い込まれるよう

に入ってしまった。両側に背の高い観葉植物が置かれている白いドアの付いた玄関の上に、ビルの名まえが書いてあるが、それは読めなかった。ただ、ホテルという英語だけが目に飛び込んだ。

来るべきときが来たのだ。一体いつから始まったのだろうか。どこをどう走ったのかわからず、やっと家にたどり着いた。そういえば土曜日なのに、帰りが遅くなると言っていた。思い起こせば、深夜に帰宅する回数が増えているような気がする。

七時を過ぎたが、食欲は全くなかった。テレビもつけず、ソファに座ったまま、気持ち落ち着かせることに専念した。あの、ワインを飲んだ夜、確かにわたしは夫の耳元でささやいた。わたしはあなたと離婚はしたくないの。でも、もし他に好きな人ができたら、遠慮なくいいから。わたしは我慢するから。椅子の高い背もたれを隔てて、私の胸の動悸は夫のところまでは届かなかつただろう。理由もなく長い間夜の生活を拒めば、離婚の対象になることは十分知っていた。しかし、わたしには理由があるのだと、それにする思いだった。決定的だとも言えるその言葉を、それまでわたしは何度も心の中で練習していた。その意味を夫ははっきりと理解しただろう。たとえ聞こえないふりをしていても、後は夫が考えればいいことだった。言ってしまうと、わたしは大きな仕事を終えたような気

持ちになった。どんな事態になつても動揺してはいけない。普通に暮らさなければいけない。誰でもない、自分が決断したことなんだからと言ひ聞かせた。

しかし、実際に目撃してしまつた今、やはり心は穏やかではない。一体どんな女なのか。今日が初めてなのか。もしかしら知らないのはわたしだけで、もう何か月も続いているのかもしれないのだ。妄想は膨らむばかりだった。こんなことで、夫が帰ってきたとき平静さを保つことができるだろうか。気を紛らわせようとテレビをつけてみる。

アナウンサーが子供達から夏休みの思い出を聞き出している。日に焼けた男の子が白い歯を見せて、海に行つたんだよと答えている。そうだ、わたしも希望通り五島列島の海に行つたのだった。ソファに凭れて目をつむる。

潜つたわたしを夫は追いかけてくる。苦しくなつて海面に出ると、また水中に戻る。山際の岩の間では、魚の群れをよく見かけた。南の海らしい、熱帯魚のような色をしたものもたくさんいる。ついに夫に足を掴まれ体を抱きしめられ、一心同体のようになつて立ち泳ぎをする。濡れた体はすべすべとして容易に密着する。思わず声を合わせて笑う。人間も魚のように体外受精が出来たらどんなにいいだろう。水の中で、夫は精子を放出することが出来るのだ。わたしの中でなくても、少なくともわたしに向かつて。もっとも、夫はそれだけでは満足できないかもしれない。そんな

なわたしの複雑な気持ちも知らずに、夫の手から逃れようとするわたしの姿を見ては、何度も面白かった。

泳いではビールを飲み、昼寝をした。魚がおいしく、豪華な食事を堪能した。仲のいいご夫婦ですね。ホテルのスタッフから何回もそう言われた。お盆の前、三泊四日の休暇の様子が次から次へと浮かんでくる。

重い腰を上げてシャワーを済ませると、思いのほか早く夫が帰宅した。十時である。お帰りと、平静を装っていつものように言う。ただいま。何の変わりもない挨拶。

「何か飲む？ お腹はいいの？」

これもわたしのお定まりの言葉。

「ちよつとビールが飲みたいね。君も少しどう？」

いつになく泥酔したい気分だったが、それを口には出さない。食卓にビールを運びながら、必要以上に夫に近づくとどこからか女のおいがするのではないか。髪に鼻を寄せる。脱いだ上着を片付けるとき、顔を服の中に突っ込む。ビールを飲む夫の唇を凝視する。グラスにわずかも口紅のあとが残りほしくないか。まさかそんなへまほしくないよね。

「珍しく部長に夕飯をご馳走になったよ」

はあ？ 飛び上がりそうになるわたしに、夫は屈託なく言う。

「ここのところ忙しくて、土曜出勤が続いていたからだろう」

らどうかと、ためらいがちに夫は言ったのだった。女性同士の方が話しやすいだろうし、彼女は出産の経験もあるし。夫はわたしのことについて彼に何でも相談しているとしか思えない。干渉されたくない。ほつといてほしいのに。もうアルバイトは止めるから。そのとき強くそう言ったわたしに、夫は何の言葉も返さなかった。

実家のご両親もきつとさびしがっているでしょう。早く初孫を抱かせてあげたいとは思わないのかね。優しげに四台目が言う。一人でビールを飲んで、それで気を紛らわせようというのかい。そのうちアル中になるのが関の山だぞ。五台目の乱暴な言葉は、わたしを打ちのめした。一台目がUターンして再びわたしの前に来ると、残りの四台もそれに続いてわたしを取り囲む。目を閉じ、顔を覆ってわたしはその場に座り込む。歩いて近くのスーパーに行った帰りだった。やつと見つけて買ったヤギのチーズと、デザートの大粒の巨峰が買いた袋の中から転がり出た。

止めてちょうだい。あなた達は一体誰なんですか。どうしてわたしのことをそんなによく知っているんですか。心の中のことまで。どこかでいつもわたしを監視しているんですか。

止めてーという自分の大声で、我に返った。気が付くと、バスタオルを腰に巻いたままの夫がソファの側で黙ってわたしを見下ろしていた。

夫を見間違ふことなどないと思っていたが、あれはわたしの勘違いということなのだろうか。

「君は元気がと言ったよ」

元上司の顔を久しぶりに思い出す。とにかく引つ込みがつかない気分で、注いで貰ったビールを一気に飲み干した。言葉に出せなかったわたしの思いは、体の中で発酵し、大量の泡となって弾けた。夫はびっくりしたようにわたしを見つめている。

やめると叫んでも、彼らはゆつくりとわたしに向かってきた。いくら速度が遅くても、自転車の集団となれば恐怖を感じる。全員がサンバイザーを着けていて、誰なのかは全く分からない。彼らの発する言葉だけが耳に突き刺さる。まだ病院に行っていないでしょう。早く行かないと、とんでもないことになるよ。一台目の人はそう言うのと、わたしの横を通り過ぎた。もう、とんでもないことになっているんだらう。あなたの旦那は、浮気をしているんだよ。それとも思い過ごしだと思っているのかい。二台目が言った。せっかく友達の親戚の看護師さんが相談に乗ってあげようと言ってるのに、人の親切も受け付けられないだね。そんな態度でいると、親戚も友達も離れていくばかりだよ。三台目の科白だった。

確かに喫茶店の友達からそういう申し出があった。病院へ行きたくないのなら、まずその人に話を聞いてもらった

「どうしたんだ、一体。眠いと言って横になってしまったから、その間に風呂に入っていたんだけど」

夕食も食わずにビールを飲んだことを思い出した。ゆつくり起き上がると、わたしは濡れている夫の胸の中に倒れ込んだ。

何事もなかったように、九月になった。気晴らしに始めた夕方のサイクリングは、続けている。サンバイザーを着けると、例のホテルのある方角へ自転車を引き寄せられるような感覚になる。何とかそれを押しとどめ、反対方向の郊外へ通じる静かな地域を選ぶようにしている。一時間くらい汗を流すと、夜は比較的眠れるようになった。運動は気分転換だけではなく、体の健康にも有効のようだった。夫の帰宅が遅くなる日には、なるべくサイクリングに出かけ、夕食には一人でもビールを飲むようになった。わたしの秘密の楽しみである。やがて元のように、夫が帰ったことも知らずに熟睡できるようになった。もちろん、ランチの仕事にも出かける。こうして健康な毎日が続けば、そのうちに転機が訪れるかもしれない。

帰り道、建物や木の影を選んで自転車を走らせる。時折吹きぬける風が気持ちよい。わたしは思わずサンバイザーを外して前かごに入れた。押さえられていた前髪が、息を吹き返したように後ろになびく。真夏の生ぬるかかった風が

嘘のような心地よさだ。同時に、辺りの景色が何ものにも邪魔されず、くつきりと視界に映りこんでくる。  
私も同じ症状でした。一人目の子を流産して以来なかなか悲しみから立ち直れず、夫を避けてきたのです。でもやっぱり時間が解決してくれると思います。私の場合、二年かかりました。今、一歳になる男の子がいます。お二人に愛情さえあれば大丈夫です。焦らないでくださいね。どうしてもというとき、最後の手段として病院へ行かれたらどうでしょうか。

しばらく前に、インターネットの相談コーナーで偶然見つけたこの女性のアンサーが、しみじみと心にしみる。自分と同じような悩みを持つ人がいて、それを克服した人がいる。わたしは自転車のスピードを上げた。今日は夫が定時に帰る。夕食には何を作ろうか。いつも面白い物をするスーパリーの看板のカラフルな字が、曲がり角でわたしを待っていた。

〔弦〕103号より転載〕



木戸順子 きど じゅんこ

- 1945 名古屋市生まれ
- 文芸誌「弦」同人
- 中部ペンクラブ理事・編集委員
- 短編小説集「思秋期」
- 2008「セラピープロジェクト」
- 全国同人雑誌優秀賞
- 12「シェルターに住む」
- 中部ペンクラブ賞
- 16「インナーマザー」
- 全国同人雑誌まほろば賞特別賞



弦 愛知県

文学力を磨き高める共通の拠りどころ

同人雑誌『弦』は一九六五年の創刊。当時の名古屋市内は、戦後復活の芥川賞を最初に受賞した小谷剛が主宰する『作家』をはじめ多くの雑誌があった。その『作家』の有力な同人、曾田文子が生導した文学グループの『新樹』と『草』が合併し『弦』を創った。曾田は一九八三年、病魔に倒れ、小谷も一九九一年に没しているが、同人雑誌を担う人から人へと、その文学は受け継がれている。

『弦』は創刊後もいくつかの同人誌と合併しながら、年に2回発行のペースを守ってきた。文学青年から始まり、何人もがバトンを引き継いできたが、現在の同人もまた、未だ壮年の気概を持って書き続けている。小説を書く同人が主体だが、本好きな人も、詩や評論、短歌、俳句をする人も加わり毎月行う例会では、いつも豊富な話題が飛び交い、笑いがたえない楽しい会である。

『弦』発行の翌月と翌々月の第三日曜日を合評会とし、その他の月は第三水曜日を読書会に充て、おもに純文学系の話題作を取り上げている。芥川賞、直木賞、その他の日本

国内の文学賞や、翻訳された海外の文学賞受賞作も視野に入れていく。最近取り上げた作品を挙げると、カズオ・イシグロ「浮世の画家」、ミラン・クンデラ「存在の耐えられない軽さ」、シャール・ペリエ「アンダーソン」「ワインズバーク、オハイオ」、堀江敏幸「その姿の消し方」、小山田浩子「庭」、今村夏子「こちらあみ子」、橋本治「草薙の剣」などがある。

文学を志すには、いろんな書物を読むことは不可欠である。読書会では、自分とは違う読み方があることを教えられる。各々の固執した考えを浄化し新たな活力を生む。海外の小説からは、異文化に触れカルチャーショックを受けたり、考え方の違いを教えられたりもする。同人雑誌は合評会で、自分らの作品の善し悪しを指摘し合うだけで済ませてしまうのはいかにも勿体ないと思う。

『弦』の同人は現在一五名、会員は一八名。同人は原稿提出ができる。同人会費は年間二四〇〇〇円、会員は年三〇〇〇円。会員の原稿提出には別に規定がある。掲載負担金は、同人はページ四〇〇〇円、会員一〇〇〇円。追加の本代は一冊四〇〇〇円。

印刷部数は永らく五〇〇部だったが、最近の送料費値上げの關係で贈呈分を五〇部減らし前号より四五〇部になった。

役員は代表（事務局）、編集、書記、会計、監査、各正副。



ではなく、開かれた中で少しでも多くの人たちに読まれ、評価されることを書き手は期待している。そして書き手は社会的にも通用するものを書きたいと願っている。

小説は虚構の創作物にすぎないけれど、真実を超える力もあるのだと信じている。力不足の原因が文章力であれば、とことん文章を磨き上げたい。テーマが不明瞭ならば、構成から考え直せばいい。人間を描く力が足りないのならば、人の生きざま、心理の表裏まで掘り下げて考えたい。俗にまみれない素直な自分のことばで表現することを心掛けたい。とにかく書かないではおられない心情を持ち続ける場が同人雑誌にはある。

同人雑誌はもはや個々に存在するときではないとも言える。お互いに交流を深め文学力を高めて、「文学」という輝かしい目標を共通の拠りどころとする場にこそすべきであろう。幸いにも一九八六年に結成された中部ペンクラブは同人誌に橋を架け合い、交流する役割を果たしている。「弦」もその一員だが、この動きがさらに広がることを願う。

(文責／中村賢三)

弦の会 〒463・0013

名古屋市守山区小幡中三・四・二十七 弦の会

電話 052・794・3430



弦合評会 いつも他の同人誌からの参加もあり、和やかに厳しく



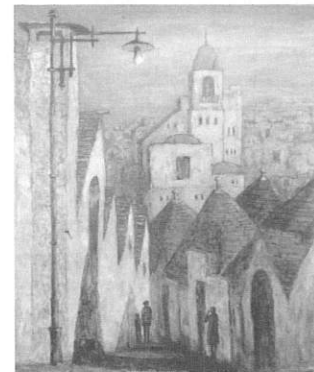
「弦」105号最終校正での編集委員、左より中村、國方、長沼、山田、市川、白井

編集委員は正副含め八名で、執筆者への校正送付と最終校正まで手分けして行っている。例会の会場は、おもに名古屋芸術創造センターを使用している。会場係が三カ月前の月初めに抽選会場へ出向き確保する。同人雑誌の維持は同人たちのさまざまな協力があつて成り立っているのだ。

弦の会では、二〇一三年にホームページを立ち上げた。二〇一五年五月発行の『弦97号』から、全作品をネット上でも読めるようにした。現在では『弦104号』までアップされている。「同人誌弦」「文芸同人誌弦」で検索すれば誰でも読むことができる。読後の感想や批評などを掲示板に書き込んで頂ければありがたい。同人雑誌という狭い範囲内

弦

第104号



## 刑事死す

## 宇梶紀夫

1

吉川郁夫は、宇都宮の生まれだが、大学を卒業するとき、亡くなった父・昭夫が地元で警察官をやっていた影響か、神奈川県警の採用試験を受け警察官になった。

三浦海岸署を振り出しに、横浜西署、相模原南署と三つの警察署に勤め、現在は戸塚中央署に配属されていた。

昭夫は二十三年前に死んだ。

四十半ばになり、時々、吉川の目の前に、昭夫の懐かしい姿が影のように漂っていることがあった。捜査が行き詰まったときなどは、制服姿の昭夫が拳を挙げて声を荒らげて迫ってきた。

「こりゃ、鼠のような刑事じゃダメだ。獅子のように勇猛

に犯人と闘える刑事がええ。闘え闘え」

と叱りつけてくる。警察官にだけはなるなと言った昭夫だったが、脳裡に浮かぶ昭夫は、反対に郁夫を励ましていたのだった。

昭夫は、初任署は、宇都宮南署だったが、その後、宇都宮東署に異動した。両署とも配属は刑事課だった。

宇都宮東署勤務の際、深夜、路上強盗事件が発生し、若い女性が殴打され重傷を負い、三十万円が入っていたハンドバックが強奪された。夜間パトロール中だった昭夫は犯人とは別の男を誤認逮捕してしまった。現場近くにいた風体の怪しい酔っ払いを署に連行して厳しく問い質すと一旦は犯行を認めた。その後、男は眠り込んでしまい、翌朝目が醒めると覚えはないと言い張った。被害者の女性に確認

して誤認逮捕であることが分かった。真犯人は同僚が事件発生三日後、現場近くで身柄を確保、逮捕した。

その当時、母・陽子は妊婦だったが、路上強盗事件の捜査ミスで苦悩していた昭夫を心配して体調を壊し、腹の中の子は流産してしまった。

少し経って昭夫は、鬼怒川温泉署栗山村駐在所に異動になった。誤認逮捕の責任をとり左遷されたのだった。

前任の巡査部長から業務引継の際、毎日管内を三度巡回するよう指示されていた。昼に一回、夕刻に一回、それに夜に一回である。巡回にはバイクで一週一時間三十分ほどの時間がかかった。一週間に一日は、鬼怒川温泉署から外勤巡査が駐在所にきて勤務をかわってくれた。この日が非番ということになる。

駐在所勤務の二年目、夏が過ぎた初秋のある日、初老の婦人が顔を青くして駆け込んできた。

婦人は、主人・鐘吉がキノコ採りに山に入ったきりその日で二日目、家に戻らず、山の中で行方不明になってしまった、なんとか見つけ出してほしいと口をワナワナさせて訴えた。

昭夫は捜索のため一人で山に入った。陽子も郁夫も心配そうに見送った。服装は、厚手のシャツに制服、その上にヤッケを着た。靴は編み上げ靴を穿いた。経験を積んだ山登りの本格派ではないもののトレッキングには少々の自信

があった。一応、鬼怒川温泉署には、入山について、その旨、連絡を入れた。単独行はやめてもらいたいが、やむをえない。警察無線機を携行、こまめに連絡せよ、入山について消防署にも伝えておく。鬼怒川温泉署の地域課の返答だった。

昭夫が入った山は、明神ヶ岳だ。標高一五九五メートルと高い。

明神ヶ岳の登山道を登りながら、鐘吉さん、と大きな声を放った。時々、生い茂る灌木の中に入り、声を張り上げた。鐘吉の姿は、見つからなかった。

昭夫は、山の肩の小さな避難小屋に辿り着くと、その日はそこで一泊した。

翌朝早く、避難小屋を出て、沢に沿って登山道を歩き出した時だった。

オオシラビソの根元に、初老の男が俯せに倒れていたのだった。

「鐘吉さん」

と大きな声を放った。

昭夫が、鐘吉の軀を抱え下山すると、登山口に栗山村の住民が詰めかけ、鬼怒川温泉署と消防署から応援部隊が待機、新聞記者がカメラを片手に陣取って大きな騒ぎになっていた。

郁夫は、鐘吉を明神ヶ岳で救出したことで、警察官とし

ての昭夫は立ち直ったのだ、と思った。

昭夫は、平屋の駐在所の執務室で鐘吉の話聞き取り、調書を作った。二人を囲むように、鐘吉の女房と陽子が見守っていた。

管内にあつては、自殺者と事故死は出さな、と県警本部長は常々言っていて昭夫は陽子にもそう話していた。父は鐘吉救出によって署長表彰を受けた。

昭夫は、郁夫が小学校六年まで栗山村の駐在所に勤務した。

その後、宇都宮西署に異動した。

栗山村を去るとき、昭夫は、陽子や郁夫に言った。

自分の人生だ。警察官を納得するまでやるんだ。それを聞いて、陽子は、頭を上下に振り領いた。傍にいた郁夫は、昭夫は腹が据わったんだと思ひ、昭夫の顔を正面から眩しそうに見た。

山間地から町中の警察署に移ってきて、取組む業務が広範囲であることに改めて身を引き締めた。

昭夫が精励<sup>かま</sup>格闘する姿を見ると、郁夫には日々の生活を送る弾みになった。昭夫の姿が明るい光のように感じられた。事実、昭夫の眼はきらきらしていたし、頬はいつもツヤツヤしていた。

昭夫は、いつも警察官の制服を着て、警棒を手に警察署に出掛けた。制服姿はヨロイを着たように見えるが、心の

かつて叫んでいた。

宇都宮西署は、すぐ捜査員を動員し、父を刺殺した組員を逮捕した。この男は組の中で怖れられている凶暴な男で、加えて覚醒剤常習者だった。

病院の担架車から父の遺体を抱え、搬送車に移した時、郁夫は昭夫の言葉を拒んで、卒業後は、警察官になると心の中で決めた。そうすることは昭夫も許してくれるだろうし、無念のうちに死んでいった昭夫への鎮魂になるのではないかと思つた。

搬送車は、陽子が待つ宇都宮郊外の昭夫の自宅に向かつて走り出した。

2

平成十五年六月一日の朝は、灰色の空が覆いかぶさり街はどんよりとしていた。

吉川郁夫は、家を出るとき、うっかりして傘を忘れてしまい、今日はなにかよからぬことが起こるのではと、不安を胸に、いつも通う市営地下鉄の戸塚駅で降りた。戸塚駅の駅舎を出ると、早くも雨が降り出していた。雨は小糠雨で、警察署までの道を歩くと結構濡れた。八時三十分、濡れた軀を警察署の扉の内側へ間一髪で吉川は滑り込ませた。

中までヨロイを着ていたかと言えば、いかつい顔や大柄な軀に反して、胸の内は優しく純情なものがあつた。

腰には、四十五口径、スミス・アンド・ウエッソンを提げていた。

郁夫の胸には、制帽、制服姿に拳銃を提げた警察署勤務の昭夫の姿が刻み込まれていた。

それから数年経って、昭夫は地域課から刑事課に転じた。

この頃、東北新幹線、東北縦貫道開通を受けた宇都宮の市街地再開発を背景に暴力団の活動が活発化、街の中がザワザワと騒がしくなっていた。

ある日、昭夫は、防具を着けなくても一人で、巡回に馴れた宇都宮の松が峰という歓楽街をパトロールしていた。そこで起きた暴力団同士の小競り合いを止めようと仲裁に入ったとき、ハネ上がりの若い組員にサバイバルナイフで胸を刺され、路上に倒れてしまったのだ。

大学三年だった郁夫は、陽子から連絡を受けると、東京から宇都宮の病院に駆けつけた。息を引き取る間際に昭夫は、絞り出すような声で切れ切れに、警察官には絶対になるなど、郁夫に言い置いて死んでいった。

病院の薄暗い地下駐車場で血糊のついた警察官の制服を脇に抱え父の亡骸の傍に立ち、葬儀社の搬送車を待つていたとき、郁夫には胸に迫ってくるものがあった。声にならない声で陽子を独り残してなぜ死んだと昭夫の死に顔に向

署内は、いつものことだが、空気が張り詰めザワザワしていた。

その日の十七時十分頃、J R 戸塚駅の改札口を西口方向に出て左手、店舗二、三軒先、宝くじ売り場の前の路上で、紺色の野球帽を被った背の高い男が改札口を出てきたピンクのスポーツシャツを着た男の前に立った。胸の前に突きだしているのは、拳銃だった。ピンクのシャツの男は、顔が歪んだ。驚愕の顔つきだ。男の口から間の抜けた吐息が漏れた。背の高い男は、薄笑いを浮かべ、相手の男の顔に一瞥をくると、拳銃の引き金を引いた。パンパンという乾いた大きい音が周りに響いた。

野球帽の男は眼の前の男が息絶えたのを見て、J R の改札口走り、ICカード用タッチパネルにパスモカードをかざすと、駆け足で階段を上がり、折よくホームに入ってきた横須賀線の上り電車に飛び乗った。動作が敏捷だった。無駄のない獣のような身のこなしだった。

銃声が駅ビル地下一階のJ R 改札口辺りに響いてから、男が一階ホームの横須賀線に飛び乗るまで僅か五、六分の出来事だった。

改札口の内側にいた駅員は、銃を持った男には近寄れず、銃撃から身を護ろうと、改札口の仕切り板の陰に屈み込んで身動き一つ出来なかった。その脇を野球帽を被った男が走り去つたのだ。

戸塚中央署に一報が入り、一番最初に現場に駆けつけたのは、刑事課の吉川郁夫刑事と相原刑事、それに制服警官四名だった。

吉川と相原は、死体を確認した。髪はフサフサと黒く、肌は艶があった。四十代だろうと、吉川は思った。浅黒い四角い顔を手袋を着けた手で動かすと、アルマーニ風のメガネのレンズに皓々と光っている西口通路の蛍光ランプが映った。オールバックに梳かし込んだ髪の毛の品のよい整髪料のニオイがした。脂ぎった顔に、しっかりと鼻梁が通っていて、やや大きめの口が小さく開いていた。歯並びが不揃いで、奥の方に虫歯の跡にあてがった銀歯が見えた。胸と腹に銃痕があり、周りに血が飛び散っていた。胸は貫かれていたが腹部には銃弾が体内に留まっていた。ピントの長袖のスポーツシャツに幅広のウールの黒地のネクタイ、紺色のパンツ、靴は踵が高い褐色の革靴、手の指には金色の指輪、左手の手首にはめられた時計は上品な薄型、パーバリーの黄色系のジャケットを右手でつかんでいた。派手な身なりだ。拳銃を使った殺人の山口といい、被害者の派手な服装といい、暴力団の抗争による殺し合いだと思った。

二人の刑事は、死体にシートを被せ、現場にロープを張り巡らせ、西口一带を通行止めにし所要所に制服警官を立たせた。

ら、逃走している犯人の降車駅がわかった。犯人は、JR戸塚駅で横須賀線に乗ると、横浜駅で下車、地下鉄に廻り、市営地下鉄に乗り、終点のあざみ野駅で降りたという。

吉川が、鑑識班の傍にいて、死体の指紋や掌紋を採取しているのを見ていると、警察無線機が鳴った。

県警本部からで、県内三か所の貸金業者事務所が拳銃や火炎瓶で襲撃される事件が起こったという。場所は、横浜西区、川崎幸区、座間だ。いずれも建物の玄関ドアや窓ガラスを狙った威嚇を目的としたもので、所員に怪我はなかった。県警本部は、県内全警察署に対し、緊急配備の指令を出した。緊配（キンバイ）ともなれば、警察官はなにを置いても戸塚駅銃撃殺人事件とそれに合わせるように起こった三か所の貸金業者事務所襲撃事件の容疑者の身柄確保に全力を挙げる。懸案の事案を一時棚上げして街に出て犯人検索をやる。幹線道路では検問が実施され、駅の改札口では警官が張り付く。

一時間後、県警本部からの無線で、貸金業者事務所襲撃犯五人のうち三名が検挙されたという連絡が入り、緊配は解除された。

三名はいずれも八幡組の組員だった。それから少し経って携帯が鳴った。須藤係長からで、犯人は、駅の防犯カメラの画像と県警本部暴力対策課の情報ファイルを照合した結果、山笠組幹部・井岡徳二と判明し

「財布、指輪……、金目のものは残したままだ」

吉川に相原が肩をすくめて言った。

「金目当てではないということか」

吉川は、顔を相原に向けて言った。

吉川は、手に持った公用の携帯電話で刑事課の須藤係長あてに、事件現場を押さえたこと、甲高い声で言った。須藤係長からは折り返しに、宝くじ売り場女店員、改札口にいた駅員など目撃者を立ち合わせ、現場検証をやるよう指示があった。間もなく鑑識班、刑事課刑事、制服組が到着し、鑑識班のチーフがひときわ大きな声を出し、死体に被せていたビニールシートを剥いだ。そして、カメラのフラッシュを盛んにたいした。

現場検証の中で、駅員も宝くじ売り場の女店員も犯人の顔は、背が高く野球帽を被りメタルフレームのメガネをかけたダンゴ鼻の丸顔の男という。服装は濃紺のジャケットに水色のスポーツシャツ、下はアイボリーのコットンパンツを穿いていた。歩き方も特徴的でガニ股のそそくさとした歩き方だった。二人とも同じことを言った。

やがて、須藤係長が携帯で伝えてきた。被害者の写真と県警本部の暴力対策課の情報ファイルとを照合した結果、被害者の身元が判明した、という。八幡組若頭・早川国男、四十三歳。住所不定、前科二犯。

JR、市営地下鉄から提供のあった防犯カメラの映像か

た。顔写真を送るのでそれを参考にせよ、さらにあざみ野駅は、現在、所轄署が固めている、刑事課の私服を動員して、周囲の地取り捜査を始めているので合流せよ、とくに駅西口方向よりも東口、新石川辺りが手薄だから張り込んでくれ、犯人は拳銃を持っているので注意せよ、泡を飛ばして声高に喚く声が聞こえてきた。

「了解」と吉川は大きな声で応え、相原と二人、すぐ市営地下鉄のあざみ野駅に向かい、二十時過ぎに地下鉄の改札口を通過し、通路に立った。改札口を出たところ、地上の東急ストアに出る階段辺り、それに、出口1、2辺りの階段下には所轄署の制服警官がジェラルミンの盾を持ち警戒態勢に入っていた。

事件発生から、約三時間が経過していた。明朝、帳場（捜査本部）が立ち上がる、という情報が流れていたが、戸塚中央署では鑑取り、地取り、凶器、暴力団関係、さらに防犯カメラ映像解析と各班に分かれて本格捜査に突入していた。

あざみ野駅の地下鉄改札口に立つと人の出入りが激しい。

改札口から東急ストア方面へ上がる階段手前に公衆電話があって、通行人を眼で追いながら、中年女性が、受話器を取り上げて何やら話し込んでいた。

吉川と相原は、この中年女性から職務質問を始めようと目配せし顔をしゃくって、お互いに頷いた。そうすると吉

川は、携帯を取り出し、先程、須藤係長が捜査員各自の携帯に犯人の衣着（ニンチャク）を映した画像を配信しているので、それを確認した。衣着というのは、人相と着衣だ。野球帽を被りメガネをかけた丸顔で口許を引き締めた彫りの深い顔。背丈は高いが、雨傘の軸のように瘦せた筋肉質の軀だ。水色のシャツの襟をジャケットの襟の上に出していた。

中年女性が電話を終えたので、吉川と相原は、女性に近づいた。相原は、腰を低くし、声を低め、

「あ、どうもすみません、戸塚駅構内で殺人事件が起こり、犯人が拳銃を持って市営地下鉄に乗りあざみ野駅で降りたことが確認されています。地下鉄のホームや改札口であやしげな男を見かけませんか？」

と言った。そして、スーツのポケットから携帯を取り出し、

「この男を見掛けませんでしたか、心当たりがあったらなんでも結構ですから話して貰えませんか？」

女性は、吉川の携帯の画面を見て、

「この男の人は見ませんでしたわよ」

といい、吉川と相原に軽く頭を下げ、東急ストアへの階段を早足で上がって行ってしまった。

吉川は、相原の肩に軽く手を触れ、駅の東口に出る出口1の方へ行くこうと顎をしゃくった。

に並んでいた。そこに入った。店長と店員が、話し込んでいるのを見て、相原が、その輪に割り込むように入って行き、切り出した。携帯の画像を見せると、一様に首を傾げて、心当たりはないとの表情だった。吉川が、今日はなにか変わったことはなかったかと、話を向けてみると、皆取り立てて変わったことはなかったと応えた。

しかし、そのうちの一人、ピザ店の制服が似合わない、長身の髪の毛の長い男が顔を上げて、話し始めた。うら若い腰の軽い店員が胸を叩かんばかりにして、すぐ前に見てきたことを次のように切り出した。

「いつも注文を頂く、近くのマンションの女のひと、今日も注文があつて、先程も配達してきたんだけど、いつもはMサイズ一枚だけど、一枚でも一人だと多いくらいなのに、今日は注文はM二枚だった。部屋の中に誰かいるのかわからないが、玄関に出てきてピザを受け取るとそそくさと、すぐドアを開けてしまった」

吉川も相原も顔を緊張させた。相原は、髪の毛の長い店員に近づいた。口許辺りを引き締めて訊いた。

「それは、どこのマンションですか？」

店員の説明をメモしていた相原は、店員が話し終えると、すぐ店の外に出て、そのマンションに向かった、その

階段を上り地上に出ると、淡い街路灯が点いていて街の姿が浮んでいた。東側へ一キロほど東名高速の高架道辺りまでは、新石川一丁目だ。閑静な住宅街だ。南に向かう道路、東に向かう道路、北に下がる道路、それぞれに制服警官が立っていた。

出口1を背にして立つと、左方向に横浜信用金庫あざみ野支店の建物があった。

信用金庫の職員に、拳銃を持った殺人犯がこの近辺に潜伏している可能性があるが、なにか変わったことはなかったか、吉川と相原は訊いた。

小首をかしげ、別に変ったことはない、女性職員は言った。

信用金庫の隣りに、桜という喫茶店があったので、吉川も相原も足が自然に向かい、その店のドアを押しした。

女性店員は、吉川の携帯の画面を見て、かぶりをふり、画面に映っている男は来なかった、と言った。

店外に出て少し歩くと狭い通りが紡錘形の街路灯の細い光に浮かんでいた。

通りは左方向に曲がっていて、あざみ野駅方面から二四六号線に向かって走っている太い道路に合流していた。

道なりに会計事務所、工務店、寿司店を訪ね、職務質問すると、男は見なかった、という。寿司店の隣に宅配専門のピザ店があつて、幾台かデリバリー用のバイクが店の前

後を、吉川も大股で追った。

マンションは、付近を東名高速が住宅街を跨がるように走っているが、その高架線の手前に建っていた。七階建て戸数七二戸の中規模マンションだ。グレース・ハイマート・あざみ野というマンションだった。

ピザ店の店員が教えてくれたマンションの二階の二〇五号室の前に、吉川と相原は立った。

相原が吉川の顔を見て頷くと、吉川は首をタテにふり、頷き返した。そして胸の拳銃のホルダーに手を遣り、拳銃をつかんだ。

相原は、インターホンのボタンを押した。少し間があつて、女の声で「どちらさん？」と訊いてきたので、警察のものですと、低い声で返した。

やがて、ドアチェーンのロックはそのままに、ドアが少し開き、隙間から柿渋色のシャツ、白いパンツ姿の痩せた女が立っているのが分かった。髪は蓬髪で潤いがなく顔は裏れていた。

「ドアを開けてもらえませんか、部屋に男がいるという情報がありました」

「捜査令状はあるのですか」と女は言った。「任意です。部屋を見せてもらえませんか」

と吉川が言うと、女は拒否して、押し問答になった。その時、廊下の向こうにソファのある居間が見え、窓際に黒

い影がゆらりと揺れて、ガラス戸を開けベランダに出て、手すりを乗り越え、芝生の庭にバサッと降りる音が聞こえた。

吉川は玄関からすぐ軀を返し、階段を駆け下り地上に出て、マンション前庭に廻った。吉川の後ろを相原が駆けてきた。

男の姿を追ってマンションの周りを駆け廻っても、男は消えてしまい、見つからないのだった。

マンションや周囲の建物、男の潜んでいそうな箇所をシラミ潰しにあたったが、男は見つからない。

吉川と相原は、マンションの二〇五号室に再び戻ってきて、そのドアノブに手を掛けた。力を入れても扉はロックされていて開かない。インターホンで呼んでも反応がない。女も姿を消してしまったのだ。

## 3

事件発生の翌日、県警本部と戸塚中央署の合同捜査本部が立ち上げられた。

捜査本部に、戸塚中央署の大会議室があてがわれ、長テールが並べられ、電話やノートパソコンが置かれた。部屋の前には、新聞記者が集まっていた。

部屋は強烈なニオイがした。捜査員の汗と煙草のニオイ、グレース・ハイマートから捜査の網を潜って井岡が逃走していることについて、井岡をマンションの中で拘束出来たのに取り逃がしてしまった、捜査員の対応ミス、緊張して捜査に当たるよう言葉を荒げて叱正した。

七十名に及ぶ捜査員に、手札判の井岡の顔写真、メガネをかけた写真と素顔の写真の二葉が配られた。須藤係長の後ろのホワイトボードに同じ写真が貼り付けであった。

「早川国男の体内にあった弾丸から井岡が使った拳銃が特定された。拳銃は、ベレッタM92、使用されたタマは、9ミリ弾。ベレッタは、一時、在日米軍から闇社会に流れた軍用自動拳銃だ。井岡は拳銃で人を殺すことを何とも思わない男だ。くれぐれも迅速に検挙するように」

須藤係長が話し終えると、隣の席に座っていた県警本部暴力対策課の藤岡課長が歯切れのよい口調で話し始めた。話の粗筋はこうだった。

山笠組は、暴対法の下、盛り場にある飲食店のミカジメ料の取り立てが出来なくなつて、新たな資金源をつくり出すため、人材派遣業や産廃処理業への進出を企んでおり、先行している八幡組と対立が先鋭化、繁華街での両組織の小競り合いが度々起こっていた。

小競り合いが、八幡組若頭の射殺まで発展してくると、裏に八幡組潰しという山笠組の組織的意図が浮んでくる。

い、緊張した人間の発する独特のニオイ、それらが入り混じって、吉川には大学の体育会系の部屋のニオイのように思えた。捜査本部設置の日の早朝、県警本部の捜査官も参加して捜査会議が開かれた。

ホワイトボードを背にして須藤係長が捜査の進捗状況について説明した。

細長い顔に白髪が混じった角刈りの顔を前の方に突き出し、張りのある声で、話し始めた。

まず、暴力団の抗争が県内で多発しているのが、重大な警備を敷いてもらいたい旨の話があり、JR戸塚駅での銃撃殺人事件の状況、被害者の八幡組・早川について説明したあと、ホワイトボードをたたきながら犯人について次のように言及した。

「犯人は、携帯で連絡したように、井岡徳二。四十八歳。

山笠組若頭補佐。前科四犯。井岡は、背が高く、筋肉質の体軀。人着では野球帽を目深かに被り、加えてメタルフレームのメガネをかけてはつきりとわからなかったが、素顔は、眉毛は濃く、右の眉毛の途中に傷がある。右の頬骨近くに四枚程の傷跡がある。顔は丸く浅黒い。頭髮は角刈り。背中に龍の刺青がある。なお、井岡が所属している山笠組の組事務所には、昨日、家宅捜索を実施した」

続いて須藤係長は、井岡のJR戸塚駅から地下鉄あざみ野駅までの逃走経路を説明、あざみ野駅東口のマンション

暴力対策課では、両組織に対して嚴重な警戒態勢に入っている。また、提携関係にある各地の暴力団が動いている。

昨日は、愛知県警から県内の有力暴力団・舞木組の十数人が新幹線で横浜に向かったという連絡が入った。舞木組は、最近、八幡組と急接近してきており、二つの組織の動きに注意が必要。貸金業者事務所襲撃は、八幡組と舞木組の合同部隊によるもので、襲撃された貸金業者は山笠組の舎弟企業だ。山笠組には名古屋の矢口組が提携関係にある。藤岡課長は、甲高い声で話した後、少し間を取って、また話し始めた。

吉川達の一報が署に入り、捜査班と鑑識班が、あざみ野のマンション、グレース・ハイマートに急行、家宅捜索した。その結果、グレース・ハイマートに住んでいた女性は茂木恵美子、四十一歳と分かった。

マンションの部屋から井岡徳二と茂木恵美子の指紋が出たのだった。茂木恵美子は前科一犯で、井岡徳二の内縁の妻。暴力対策課の情報ファイルから得た逮捕時の容貌とマンション管理会社から提供を受けた直近の防犯カメラの画像とは似ても似つかない顔かたちをしている。

逮捕されたとき、茂木恵美子は、ノースリーブのブルーグレーのワンピース姿。八月の猛暑のせいか両腕がこんがり日焼けしていた。背が高く、胸がツツと突き出ている。胸の豊かな隆起や腰のくびれ、強く張った臀部は、好色な

男の視線を集めた。

しかし、マンシヨンのエレベーターホールの防犯カメラが捉えた、現在の茂木恵美子の容貌は、なにかあったか不明だが、まるでガン患者のように痩せ細っていた。眼は落ち窪み頬はこけ顔色は青白く、皮膚は潤いがなかった。髪の毛はボウボウ。

藤岡課長は、そう言ってホワイトボードに貼ってある茂木恵美子の写真を指さした。井岡徳二と茂木恵美子は、二人連れだつて逃がっている可能性が高いと、言い放った。

そして、八幡組による山笠組への報復、山笠組の八幡組への再度の攻撃をなんとかしても防いでもらいたいと、語気を強めた。

須藤係長は、藤岡課長の話を受けて、井岡徳二を殺人、死体遺棄容疑及び銃刀法違反容疑、茂木恵美子を殺人犯隠匿容疑で全国に指名手配したと言った。

二人の追跡捜査の強化、県内のホテル、旅館の一斉捜査など指示が出た。加えて、茂木恵美子は自分のマンシヨンに戻ってくる可能性があり、そのマンシヨンの張り込みを続けるよう指示が出た。

捜査会議は散会となり、七十名に及ぶ捜査員は現場に散った。

吉川と相原は、あざみ野の茂木恵美子のマンシヨン、グ

「井岡には、組織上の問題があるんだ。それに促されて早川国男を銃撃したんだ」

吉川は、井岡の背中に彫られた精緻な龍の刺青を思い浮かべた。

八幡組潰しという山笠組の生き残り戦略に、若頭補佐の井岡が組織の中で飛躍をはかって自分の人生を賭けたのではないのか、今回の井岡がとつた行動はそうとも考えられた。

相手の八幡組も生き残りを賭けて、山笠組潰しを企んでくるだろうし、殺人犯として手配されている捨て身の井岡が、第二、第三の銃撃殺人事件を引き起こしてやるのではないか、と思った。

「相原よ、井岡を早く捕まえるんだ、そうしないと自暴自棄になってる井岡が何をしてくるかかわからねえよ」と吉川が言うと、相原は頷いた。

車は、東名高速横浜インターの前を通過し、激しい渋滞の中を東京・渋谷に向かう二四六号線に入った。スピードを上げて北進していくと、あざみ野に近づいてきた。

新石川という道路標識のある交差点で左折した。対向車が稲妻のような光を投げかけながら東名高速の高架道路の方に進んで行った。グレース・ハイマートの正面のハナミズキが幾本か植わっている植え込みの前で車を止め、ヘッドライトを消した。

レース・ハイマートに向かった。

相原が運転する車の助手席にいて、吉川は窓から街の姿を見ていた。一六号線は相変わらず混んでいた。

相原は車のスピードを上げながら、

「井岡は、幾つか逮捕歴がありましたね」

と、茂木恵美子と井岡徳二のからだんだん事件を思い出しながら風景ばかりを見ている吉川に、大きな声で言った。

「ああ、そうだな、井岡は前科四犯だ」

「今度の銃撃殺人で逮捕されると、井岡はどのくらいの量刑になるんですかね」

「最近の暴力団の抗争による殺人事件の判例だと、三十年懲役、無期懲役というのが出てきている。暴対法が改正され、この種の事件の裁判は厳しくなっているんだ」

「井岡は四十八歳だから、三十年も刑務所で暮らすと、出所してくるのは七十八の年廻りになる。七十八になって出所してきても、もうそのあとの人生はなきに等しいということになる。井岡の人生というものを考えると帳尻は合うんですかね」

「大体、井岡のような男が、お前のいう人生の損得を考えて合理的な判断が出来ると思うか。できるのなら、殺人を犯すようなバカなことはしないよ」

吉川は、助手席シートによりかかっていた軀を起きあがらせた。そして続けた。

車を停めている道路をスポーツ用のジャージ上下を着込んだ中年の男がジョッキングをしていた。その男の肩越しに蛍光塗料を塗ったメッシュのベストを着た制服警官が警棒を手にマンシヨンの警戒に当たっている姿が暗闇の中に浮んだ。その警官に吉川と相原は大きく手を振った。二人は、この夜、張り込みに当たった。

4

戸塚駅銃撃殺人事件は、発生から一週間が過ぎ、捜査は膠着状態に陥っていた。

捜査本部は、昼夜問わず井岡の追跡捜査に懸命だった。勿論、吉川と相原もその一員だった。吉川は、一週間を過ぎると、戸塚中央署の地下一階の道場に寝泊まりしていたのを切り上げ、夜は自宅に帰るようになった。

ある日、吉川が捜査書類づくりケリがついたので捜査本部を退こうとして、壁に掛けてある上着を着て、カバンを抱えたところに、相原が顔を出した。

七、八人が長テーブルで仕事をしているほか捜査本部には、殆ど捜査員の姿はなかった。

相原が、茶目つ気たつぷりにニヤツと笑って、「先輩、今晚は少しやりませんか」

盃の形を指でつくり口許へ運び肩をすくめたので、

オー、いいよと返した。

鳥勝という焼き鳥屋があった。行きつけの店だ。警察官が気楽に入れるような店は限られていたが、鳥勝は数少ない店の中の一軒だった。

小雨が降り続いていて、入り口の引き戸の裾が濡れていて戸を開けると軋んだ。

店に入ると、照明の届かない隅のテーブル席へ自然と軋が進んでいった。その向こうにカウンター席が六席あった。テーブルも二人の座ったテーブルを含めて二脚しかない、小さな店を店長独りで切り盛りしていた。

店の中央に薄橙色の照明がぼんやり灯っていた。カウンター席の向こうに調理場があって、その壁面に大きなファンが廻っていた。焼き鳥を焼く煙が、このファンに吸収されていく。

カウンター席が大分空いているかと、吉川がカウンター席の向こうの調理場の方を窺っていると、やがて、引き戸を音を立てて開け、四、五人が連れ立ってざわざわと入ってきて、カウンター席はすぐ満席になってしまった。

「井岡が、いまだここに身を潜めているか、当然、茂木恵美子と一緒にしないでしょね」

と相原は、ビールを満たしたコップを口に運びながら声を潜めて吉川の顔に言った。

少し間を置いて、また相原が言った。

相原と二人で頬張ろうと思いい、焼き鳥を、カシラ、タン、レバー、三本ずつ、塩味で頼んだ。そうすると、店長からホーイという朗らかな声が返ってきた。

眼の前の相原も喉が渴いているのか、ビールそれに焼酎をよく呑んだ。どくどくとコップに焼酎を七割方注ぎ申し訳程度に三割のお湯を足し、それをさっきから何杯も喉に流し込んでいた。つられて吉川も焼酎のお湯割りを呷った。

相原は背が高く胸が広くずんぐりとした体型だ。色が黒く、角張った顔で物の言い方や動作がへりくだっていた。

吉川は、学生時代に空手で鍛えた筋肉質の軀つきで、顔は父・昭夫似の頬骨の出たやや長目の顔だ。

吉川は大卒で警部補だが、相原は高卒で、階級は同じ警部補だ。吉川は四十四歳、相原は四十一歳で、ここ四、五年、相動員として、連れ立って事件の捜査に当たってきた。相原は、実直で直情径行のところがあったが、吉川は、慎重で堅実なところがあった。そんな性格の違いもあって、どことなくウマがあった。

宮城県生まれの相原は警察官試験の勤務希望欄に第一希望に宮城県警、第二希望に神奈川県警と書いて試験を受けたら、宮城県警は不合格、神奈川県警は合格だった。

警察はガチガチの階級社会、巡査から始まって、警視総監まで九つの階級がある。ちなみに巡査からすぐ上の巡査部長に昇格するのに順調にいつて、高卒で四年、大卒で一

「吉川さん、名古屋の舞木組は今でも組員を横浜に派遣していて、山笠組を窺っているという話です」

「ああ」と相槌を打った。

店の隅の窮屈なテーブル席で、顔を上げないで、俯き加減に声を潜めて話を交わし、話の合い間に、ビールや焼酎のお湯割りを呑んだ。

吉川は、隣のテーブル席もその向こうのカウンター席も客で埋まり、ポンポンと愚痴や世迷い言を繰り出す赤の他人の酔払った顔を見て、いつもの呑み屋らしくなってきたかと、小さく頷いた。

吉川は、焼酎のお湯割りを呷った。

調理場の店長に届くように声高に、

「シラス卸し、ひとつ」

と言った。大根卸しが食べたいと思った。特に、辛みが鼻に抜け、いたたまれなくなる、あの夏大根のワイルドな味が欲しいと思った。

家にいると、女房の珠恵は吉川の好物を知っていて水洗いした大根を卸し金ですりおろすよう促す。吉川は、力を入れておろした。そうして、卸し大根に酢を少々落とし醤油を垂らして食べるのだ。

大根卸しの味を口の中に浮かべ、焼き鳥屋のシラス卸しをつついて食べた。あまり辛くはなかった。

年かかる。

吉川も相原もノンキャリアだが、県警本部長（警視長）まで昇任が可能だ。つまり、昇任試験に合格して階級を上げていけば、学歴にかかわらず出世の道が開ける。

逆から言えば、警察社会の中を相原みたいに高卒で出世していくとなれば、昇任試験に合格して上に上がっていくほかない。

刑事になるのも狭き門をくぐらねばならない。全国の警察職員二十六万人のうち、刑事はその一割、制服警官が刑事になる倍率は六百倍といわれる。

警察官になると、最初は、機動隊に配属される。数年経つと、所轄署の地域課に配属され交番勤務につく。刑事を希望するものは、三、四年、交番勤務で実績を積み、上司の推薦を勝ち取らねばならない。推薦を得た警察官は、書類審査と面接試験を受ける。合格になるのは一つの所轄署で一人か二人、年によってはゼロという厳しさだ。

吉川が相原に会ったとき、相原はガチガチの出世主義者だった。刑事になっても精勤は言うまでもなく、眼をギラギラさせて手柄をたてようと先駆けの行動をとった。

吉川は焼き鳥を勧めながら、

「相原よ、今度のヤマのホシにオマエが手錠をかけたなら、オマエは県警本部長賞がもらえるんだ。狙っているのは警察署長だろ、頑張れよ、アハハハ」



と言った。

相原は、吉川にからかわれても、眼を光らせて、「吉川先輩と違って、オレみたいな高卒は、昇任試験と手柄の大きさと数で認められていくほかない。しかし、四十を超える、昇任試験はきつくなってきたな、警察署長になるのは、オレはムリだな」

と言いつ、ハハハと低く笑って、焼酎のお湯割りの底に沈んでいる梅干しを割箸で、サ、サーと掻き廻し、梅肉が汚らしく浮いている焼酎を口に運んだ。

今回の事件の犯人をあげたら、当然、本部長表彰だろう、万引きや窃盗犯逮捕とは違うんだと、吉川は思った。

「オマエはえらいよ、オレなんか、表彰にはここ数年まったく縁がねえんだ」

と言いつ、皿に残っているシラス卸しの残りを食べた。

5

吉川は、思いつきタバコを喫い込み、口を尖らせ煙を吐いた。

タバコを喫っている場所は、自宅の玄関ポーチの踏み段の上だ。古い水撒きホースがポーチの手摺りからとぐろを巻いてぶら下がっている。家の中でタバコを喫うと、女房の珠恵がムツとした顔をする。

ひと通り説明が終わると、珠恵はビニールハウスの向こうにある牛の放牧場に吉川を連れて行きメロン盗難事件の捜査状況など婉然と微笑を浮かべてたずねるのだが眼は放牧場の牛の群ればかりを追っていた。

吉川は、珠恵にひと目惚れしてしまい、頻繁に農業試験場に通っていたが、珠恵は情熱に負けてしまい、吉川の気持ちを受け容れたのだった。

少しの間、犯人は現れなかったが、珠恵の助言で夜海辺の大規模メロン農家のハウスで同僚と張り込みをしていると、深夜二時の頃、若い三人組が現れ、南京錠を破り、メロンを持ち出そうとしたので現行犯逮捕した。この農家は、新品種のメロンに挑戦していて、珠恵は必ずその品種はヒットすると睨んでいたのだった。

吉川は、三浦海岸署では、主に盗犯捜査に従事し、バイク盗犯を次々と挙げた。異動になった横浜西署で刑事になり刑事課の藤岡係長（現在の県警本部暴対課長）の下で殺人などの強行犯捜査に組み入れられ刑事の腕を鍛えられたのだった。

スウェットシャツによれよれのジーパン姿の吉川はゆっくりと紫煙を吐き出した。

宇都宮のマンションにいる母親の陽子の顔を思い浮かべ、もう一服、タバコを喫い込んだ。

戸塚駅殺人事件は懸命の捜査を繰り返して、間もなく解決

家は大和にあった。気に入った中古住宅を買い求め住んでいた。郁夫と珠恵の間には、子供が二人いた。上の子は中学二年の娘、下は小学三年の息子だった。

吉川と珠恵は農業試験場でお会った。

その頃、吉川は三浦海岸署にいて、ある事件を追っていた。冬温かい海に面した街の農村部は、全国でも有数の蔬菜地帯だった。

手掛ける野菜は、大根やキャベツが主体だが、高収益を狙ってスイカやメロンに転換する農家が増えていた。しかし、これらの高級果実の盗難被害が後を絶たないのだった。

毎年、犯人は六月を過ぎると現れた。ビニールハウスのとびらの南京錠を易々と破り、収穫間際のアールスメロンを何百個もごっそりと盗んでいく。手口からして暴力団の仕業かとも思えたが何の証拠も得られず、無為に時間を過ごすうちに、メロンの生育特性を頭に入れておこうと県の農業試験場を訪れたのだ。

対応してくれたのは、白衣を着た大学農学部を出たばかりの若い女性研究員だった。頭の後ろで簡単にひつつめた黒髪が日の光にキラキラ光っていた。額は広く、両頬が艶つやとして桃のように膨らんでいた。ビニールハウスの中のメロンの果実を見ながらメロンの生理生態の説明を受けたが、吉川は傍にいる珠恵の顔ばかり見ていた。歩くと豊かな胸がゆさゆさと揺れ、甘酸っぱいような香りが立った。

になると吉川は高をくくっていたが、犯人の行方がつかめなかった。

事件は発生から、二十日を越え二十五日になっていた。この間、八幡組の仕業と見られる報復が散発的であった。山笠組の組事務所への発砲、組長や若頭の女房がやっているクラブやバーへの嫌がらせなどだ。それらは、あらかじめ所轄署が警戒態勢を敷いていたため、封じ込められていた。

捜査は手こずっていて、吉川も疲れ切っていた。二十日を過ぎると、帳場は縮小された。投入される捜査員は、七十名から三十名に減り、帳場の拠点も大会議室から刑事部屋に移った。吉川は、捜査態勢が縮小されても、相原と犯人の追跡捜査を続けていたが、前日、須藤係長から一息入れるとやっと非番を言い渡された。

吉川は、二本目のタバコに火を点けた。

宇都宮の小さなマンションで暮らしている母親の陽子は、七十二歳になるが、最近、目がかすみ新聞が読みづらくなった。眼科医に診てもらったところ白内障で、治すには手術が必要。手術の日に、手術同意書をもってきてもらいたいと言われ、書類には保証人の署名、捺印が必要だと、母は、吉川に伝えてきた。

そういう電話が一週間程まえにかかってきて、それから二、三日経って、封書が届いた。一枚紙の手術同意書が同

封してあった。

吉川は、手術同意書にはきちんと署名・捺印し、宇都宮まで出掛けていき、陽子に手渡そうと思った。非番のこの日、宇都宮に向かった。

車窓から沿線の景色を見ると、梅雨明けはまだだが、すっかり夏の様相だった。陽差しはきつく、子供、女性は殆どが半袖シャツだし、日傘をさしている女性もいた。田圃の稲も大分伸び緑の色が濃くなっていた。

JR宇都宮駅で降りて、待ち合わせの駅ビルのハンバーガーショップの前に行くと、陽子が立っていた。バスのロータリーの右手を見るとトチの木が丈高く伸びていて、その大きな葉が午後の白い光に浮かんでいた。

陽子は、インゲンのような細い軀を弾ませて、吉川の方に視線を向けていた。

吉川は陽子の姿を見ると、手をあげ近づいていった。

近くの回転寿司店に誘い、そこで二人で遅い昼食を食べた。

駅の近くの陽子の住むマンションに入ると、三時過ぎになっちゃってしまっていた。部屋はこじんまりとしてよく整理されていた。居間にソファがあって、その向こうが台所、居間の右隣が寝室、寝室の向こうはベランダになっていた。父親の昭夫が死に、吉川が横浜で所帯を持って暫くして陽子はそれまで独り暮らししていた平屋の狭い家を買った。

て小さなマンションを買い、老後の独り身の気兼ねなしの生活を楽しんでいった。

カバンから手術同意書を出すと、眼の前の陽子に渡した。陽子は、ありがたうと言って受け取り、湯呑茶碗の茶を呑むと、扇子を展げて扇いだ。扇子には、紺色の房がついていて扇ぐと揺れた。

壁に掛かっている昭夫の表彰状を見た。配属になった警察署の署長表彰が四枚、県警本部長表彰が一枚だった。吉川が幾度も繰り返し見てきた表彰状だった。

吉川は、警察署長表彰はあったが、本部長表彰は一枚もなかった。

昭夫は、階級は吉川と同じ警部補だった。五十一歳で凶刃に倒れたがそれまでの捨て身の勤め振りが表彰状に現われていた。吉川は仰いでみて頷いた。

視線を移して、ソファのテーブルの上を見ると、観光地のパンフレットが置かれてあった。掌に載せて見ると、栗山村にある日帰り温泉とロッジが、カラー写真入りで周辺の地図を添えて詳しく紹介されていた。

「母さん、栗山村へよく行くの」

と陽子に尋ねた。

陽子は、昭夫が駐在所勤務になったとき、栗山村が気に入っていた。駐在所住宅裏の、台所の窓から見える段々畑を見て、

と吉川は言った。

「あなたの顔を見ていると、捜査がうまくいってないことが分かるわ。悩んでいるところは、お父さんの顔に似てきたわね」

と言って、陽子は、吉川の顔を優しい眼で見つめた。

吉川は、少し経って陽子のマンションを退いた。

エントランスから外に出ると、携帯を取り出し、須藤係長を呼んだ。

須藤が出ると、もう一度、首都圏の山間のオートキャンプ場、ロッジ、ペンション、民宿などの宿泊施設を洗うように頼んだ。

駅に向かう道を歩きながら、陽子の喉の周りを刻む皺を眼に浮かべ、本人は突っぱねるだろうが、陽子を引き取ることも考えなくては、と思った。突っぱねたら、幾度も繰り返して同居の話をするんだと、吉川は思った。

6

翌朝、出勤すると、須藤係長が近づいてきた。

半白の角刈りで細長い顔の額に縦皺を刻んでいて、ストレス太りなのか、腹が突き出ていつも波打っていた。

「昨日の件、首都圏の各県警に連絡しておいたよ。確かに我々の視線は、山間地ではなく都会の旅舎に向かいがち

「この野菜、新鮮で美味しいのよ」

と言って、畑の農家から野菜を買っていた。現在は、県道沿いに道の駅が建っていて車で行けば野菜はいくらでも買えた。

「最近、新しい日帰り温泉が出来て、そこに行つて近くのロッジに泊まってきたの。安いのよ。姉と二人で行つてきたの」

陽子は、ニコニコした顔で吉川にそう言った。

パンフレットを掌にした吉川が、

「ロッジか……。そうか、ロッジか、二人が潜んでいる可能性があるな」

と、ボソッと呟いた。

井岡徳二と茂木恵美子の潜んでいる可能性のあるところを狙って、チラシをバラまきホテル、ウィークリーマンション、旅館等を重点的に当たってきた。

しかし、それは、都市部の町中の旅舎が主だった。山間地のとくにロッジなどには行くまいと、軽く考えていた。もう一度、山間地の宿泊施設をひとつひとつ潰していくかと、茶を飲みながら、吉川は考えた。

「ロッジがどうしたの。いま手掛けている事件となにか関係あるの」

と言ひ、不安そうに吉川の顔を眺め、また、扇子を扇いだ。「捜査のことは話すことは出来ないんだ」

だった。ここ二、三日で返事が返ってくるはずだ」

と須藤係長は言った。

一日経って、返事を寄越したのは、栃木と群馬で、井岡徳二と茂木恵美子の二人連れに関する情報はなかった。

二日目の午後、山梨県警からの連絡で、道志川沿いのロッジに一週間前から三日ばかり連泊した二人連れがおり、管理人に写真を見せると、井岡徳二と茂木恵美子に間違いはないという。山梨県警からの連絡に部屋の中は色めきたった。

須藤係長が中央のソファで少し遅い昼食のザルソバを旨そうに食べながら、

「山梨県警に捜査協力依頼の電話入れておくから、すぐに道志川に行つてこい。ロッジからは姿は消したけどその付近にはいるかもしれない、なんとしても探し出すんだ。相手は拳銃を持っているんだ。防具を着けていけ」

と、のけぞり、手に持っている割箸を吉川と相原に当てて言った。

吉川と相原はセダン、鑑識班は三人でミニバン、と二台の車両で山中湖近くにある道志川沿いのロッジに向かった。

相模原市の旧津久井町青山から四一三号線に入り青根原を越えると道がくねくねとしてくる。山道を登り、山中湖方面に向かう。月夜野峠に入るとヘアピンカーブが続き、警笛を鳴らしながら峠道を登ると車輪がアスファルトに食い込みヒタヒタと粘り着くような音を立てる。

やがて、険しい山道を登り切ると、左手に道志川が見え始める。四一三号線に並行して流れているせいか、川の瀬音がすぐ傍らから聞こえてくる。

「大分、姿をくらましていたので、名古屋の矢口組がかくまっているのじゃないのか、と思っていたんですが、やつと姿を見せてきましたね」

と相原は、車のハンドルを握りながら、吉川に言った。谷間の道を山中湖方面に進むと、川の向こう岸の杉林が大きく伐り開かれた場所があった。道志川の河川敷を利用したキャンプ場で、山側はロッジが幾棟か経っていた。

道志川を渡った橋のたもとに、山梨県警の刑事が二人立っていた。ひとりは短髪で陽に灼けた顔、もう一人は、メタルフレームのメガネをかけていた。

吉川達は、二人の刑事に合流し、橋を渡って管理事務所に行き、管理人から話を聞いた。

中年の男女二人は、六棟建っているロッジの一番奥のロッジに三連泊し、二日前に退いた。

管理人が見せてくれたロッジ利用の宿泊者名簿には、角張った字で山田厚夫、文子と、夫婦連れに装って書かれてあった。

鑑識班は、宿泊者名簿を丁寧にビニール袋に入れて押収した。

吉川はポケットから、井岡徳二と茂木恵美子の手札判の

手配写真を見せ、この二人に相違ないかと、訊いた。

管理人は、あ、この二人です、とすぐ頷き、酒焼けた顔を振った。

「刑事さん、この人たちは、一体何をしたんですか」

と管理人が言った。

相原は、

「いや、なんでもないんだ。ただ、参考までに訊いているんだ」

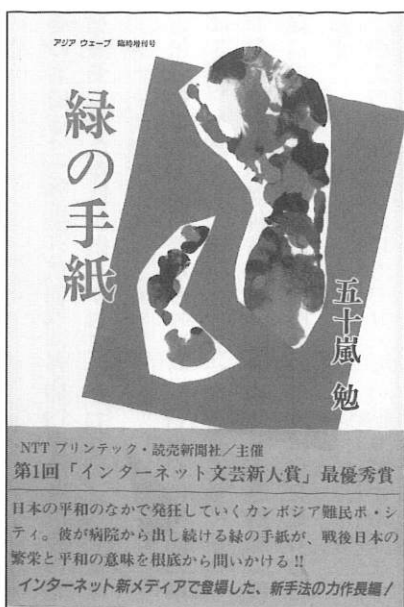
と応えた。

井岡達は、トタン葺きのログハウスに入ったきり、余り姿を見せなかった、と管理人は言った。ログハウスの玄関口に駐車スペースがあって、そこにブルーの古い型のセダンが三泊の逗留の間、ずうっと駐まっていた、ログハウスから余所へ出掛けることはなかった。管理事務所を通せば、仕出しを取ることができるが、二人は食料を準備してきたと見え、仕出しの依頼はなかった。

「大騒ぎする若者のグループなんか比較べたら、静かな泊まり方だったですよ」

そう管理人は言った。

部屋に案内してくれと、管理人に言い吉川達は、周りに杉の木立が茂っている一番奥のログハウスに向かった。中に入ると、居間と食堂と台所に仕切りはなく、広々とした板敷きの部屋に座卓が置かれていた。



1700円(税別/送料共)

御注文は折込葉書でアジア文化社まで

唾とか体液がとればよいのですが」

「ゴミは残ってないのですか」  
「管理人に聞いたら、二日まえのゴミは昨日、業者が来て持って行ったとのことです」

鑑識班のチーフはそう言って、顔をしかめた。

警察車に乗り、ロッジから退こうとすると、山梨県警の二人の刑事が軽く頭をさげ、吉川達を見送った。

周りはすっかり日が暮れて、山々の黒い樹影が行く手を昏くしていた。

帰りの車の中で相原が言った。

「ここを出て、井岡はどこへ向かったのか。これはカンですが、今度こそ名古屋の矢口組に向かったのではないかな」  
座席に軀を沈み込ませながら、吉川はぶつきらぼうに  
「オレのカンは、二人はここから横浜に戻って、そのうち必ず姿を現すってことだ」  
と言った。

7

ロッジを搜索してから二日経って、捜査本部に座間市の市民から思わぬ目撃情報が寄せられた。テレビや新聞で報道されたのを記憶していたのだろう。座間署の巡回パトロール中の警官に、買い物に出た主婦からもたらされたの

だ。

その主婦は、「商店街の一角にデリヘルのお店があり、茂木恵美子に似た女性が入りしている」と言った。朗報だった。

吉川と相原は、座間署からの連絡に、すぐに座間に車を飛ばした。

十六号線を走り東名高速横浜町田インターを越え二四六号線に出て南下し、小田急線座間駅付近に車を進めると、相原が、

「この辺の電柱、どれにもデリヘルの貼り紙があります。ほら、この電柱もそうだし、前の電柱もそうだった……」

そう言って、電柱を指して吉川の顔を見た。電柱の貼り紙は、雨風に色褪せているとはいえ、文字も電話番号も十分読み取れた。

「貼り紙には、座間デリヘルと書いてある。デリヘルは暴力団の舎弟企業がやっている。そういえば、貸金業者事務所襲撃は、三か所のうちひとつはこの座間だった」  
相原は再び甲高い声を出した。

吉川は、いきなりセダンを停めて車を降りた。

「相原、この座間デリヘルに行ってみるか」

大きく叫んだ。

携帯を取り出して須藤係長を呼び出し、貼り紙に掲げられている座間デリヘルの電話番号を読み上げ、住所を調べ

てくれるよう頼んだ。

舎弟企業の住所なら情報ファイルにあるはずだった。

五分ほどで返事が来た。

住所をメモすると、小田急線座間駅東口のスーパー三和の近くだった。

「おう、相原、座間デリヘルが分かったぞ」

と吉川は言って、アクセルを踏んだ。

小田急線座間駅の東口ロータリーから東へまっすぐ延びている道路がある。五分ほど行くと、左側にスーパーがあり、このスーパーの東側の路地に商店が並んでいた。ピザの宅配店、自然食品の店、コーヒード豆の店、豆腐屋、殆どが平家建てのこじんまりした店だ。

この路地の奥の角地に二階建てのモルタルの建物があった。

デリヘル店の建物だった。青い瓦屋根の二階建てで、一階も二階も窓には鉄の柵がある。店が流行っていた頃はヘルス嬢をここに住まわせていたのだろう。ヘルス嬢の部屋を鉄の柵で囲いこんで無言の圧力にしているのだ。外壁は、アイボリーで路地の中では目立つた建物だが、周りの人の話では、ここ二年ほどは空き家だったという。

ガレージに薄汚れたブルーのセダンが突っ込んであった。井岡が道志川のロッジに駐めていた車だ。

一階と二階の間に「座間デリヘル」と書いた大きな電飾

看板が掲げられていた。まるでブティックの店名のような書体で書かれてあった。

相原が周りの商店に聞き込みをしている間、吉川は、建物の周囲を歩き、こういう店を井岡達は、近隣の相模原や厚木に幾つか置いているのだろうと思った。

建物の裏に消費電力を示す電力メーターがあり、くるくる廻っていたし、水道の検針メーターも動いていた。

程なくして、聞き取りをしていた相原が戻ってきた。

「間違いありません、井岡と茂木の二人がこのデリヘル店の二階に住んでいるとのことですよ。一、三人の方が二人を見たと行ってますし、今日も出入りした姿が目撃されています」  
と相原は吉川に言った。

8

午前七時頃、相鉄線さがみ台駅方面から座間駅東口近くの「座間デリヘル」に向かって五台の警察車両が進んでいた。五台の車両は、二台がセダン、三台がワゴン車、車両の座席は捜査員で埋まっていた。

捜査員は皆上半身に防弾ベストをつけ、鉄製のヘルメットをつけていた。緊張した面持ちで軽口をたたくものは誰もいなかった。

吉川と相原は、前日、座間署に「座間デリヘル」への監視態勢を早急に敷くように連絡し、派遣されてきた捜査員と交代し戸塚中央署に戻った。「座間デリヘル」に井岡徳二と茂木恵美子が潜んでいると携帯で連絡しておいたが、詳細を須藤係長に報告すると、大きな背中を見せて、暫く考えていた。やがて、携帯で県警本部に電話を入れ、部長の了解をとりつけると、やおろこちらに顔を向け、「明朝六時、戸塚中央署集合、全員揃ったら、座間に向けて出動する。現場の陣頭指揮は藤岡捜査本部副部長・県警本部暴力対策課長がとる」と大きな声をあげた。

空はどんよりとしていた。梅雨入り宣言が出て二週間が過ぎていた。

そのどんよりとした空を遮るように背の高い警察車両で、スーパー三和の東側の路地の出入り口を封鎖した。角地にあるデリヘル店の周辺の家々に一時避難退去するよう伝え、家から出てもらった。

藤岡課長は、路地の全体を見廻して、捜査員の位置を確認すると笛を鳴らした。ピーイー、ピーイーと甲高い音が立った。

笛の音に弾かれるように、重さ三キロの鉄のヘルメットと防弾ベストを着けた警察官三十名が鉄製の盾を軀の前に置いてデリヘル店を包囲した。入り口にセダンを停めた。

時々、息を殺して背広の上からその拳銃を触っては、二階の窓を見た。青ざめた額に血管の筋を立て、後方にいる藤岡課長の指示を待っていた。

デリヘル店の二階から路地に突き出た出窓があつてレースのカーテンが下がっていた。

藤岡課長は、この出窓をねらつて、ガス弾を打ち込もうとしていた。催涙ガスを充満させれば部屋の中にいられなくなる。

三名の警官が路上に片膝つきガス銃を構えていた。

藤岡課長は、ハンドマイクのポリウムを上げて、「井岡と茂木、君たちは包囲されている。拳銃をこちらに投げて寄越しなさい。それから、観念して建物から外に出てきなさい」

と叫ぶように言った。

課長も、鉄のヘルメットを被つていて、鋭い目付きの強気な顔つきだ。指揮棒を振ると、出窓に向けてガス弾が発射された。ガラスが飛び散り、暫く空き家だったせいにか大量の埃が舞上がったが、部屋の中に動きはなかった。周囲を包囲している警官隊は、井岡が反撃弾を打ち込んでくると身構えたが、物音ひとつなかった。

しかし、少し間を置いて井岡の拳銃が乾いた音を響かせた。弾は吉川と相原が身を潜ませていたセダンのトランクの盾を直撃した。吉川と相原は、狙われていると思い、互

開けた後部トランクの蓋を盾に、吉川と相原が腰を屈めて、二階の窓に眼を向けて井岡の出方をうかがっていた。セダンの四メートル先には鉄の扉があり、その向こうは玄関、その先に二階へ上がる階段がある。

誰かが鉄の扉を押し開け、階段を駆け上がり二階に突入しなければ、井岡に手錠をかけることはできないのだった。

吉川と相原は、藤岡課長から無線で突入の命令が来るのを待っていた。

吉川は、戸塚中央署に配属になって始めて拳銃立てこもり事件に直面した。心の内の緊張と興奮を沈めようとセダンのハンドルを握って戸塚から運転してきたが、座間の現場に到着してもまだ緊張していた。

隣にいる相原の顔を見ると、平然とした落ち着いた顔だった。むしろ、若々しい闘志が現われた顔だ。吉川の傍にいてときどき白い歯を見せている。こいつは、まだ修羅場の経験がないのではないかと、ともう一度相原の顔を見て、小さく溜息を吐いた。

県警本部の機動捜査隊が、吉川がかがんでいる角地近くの向こう側に立っていて攻撃の足場を作ろうとやはり盾を前面に出して中腰の姿勢を取り始めた。胸の脇のホルダーに拳銃が差してあるのが見えた。

吉川も頭には鉄のヘルメット、背広の下には防弾ベストを着けていて、上着の裏にはリボルバーをしのばせてい

いに眼を見、顔を引き締めて頷きあつた。

藤岡課長がガス弾を打てと再び命じた時だった。壊れた出窓に人影が浮かび、拳銃が火を噴いた。井岡は藤岡課長をねらつて、まっすぐ打ち込んだのだ。弾は藤岡課長の頭の近くを飛び後ろにあるコーヒー豆店の窓ガラスを粉々に砕き店内に飛び込んだ。

少し経って、出窓に人影が浮かんだ。褐色の鳥打帽を被っていた。股に挟んだビールを手に取りラッパ飲みを始めた。飲み終えると、ガス弾で木々端微塵に壊れたガラス窓から警官隊に向かってビール瓶を投げつけた。井岡は催涙ガスを吸い込んで、ヨタヨタしていた。出窓の脇のカーテンの降りている窓めがけて警官隊が、ガス弾を撃ち込んだ。井岡は拳銃を三、四発撃ってきた。そのうちの一発が、再びセダンのトランクの盾に当たった。

井岡の反撃弾が途切れたときだった。藤岡課長が、吉川と相原に突入せよと無線で伝えて寄越した。吉川と相原は、体を起こして走り出した。吉川は電動カッターを抱えていた。盾を持った警官隊が吉川と相原の後を追って一斉に入り口に押し寄せてきた。

吉川と相原は、入り口の前に来ると、扉に近づき、電動カッターを使って鉄扉を切断し、押し開いた。リボルバーを手に玄関に入り階段を駆け上がった。吉川が階段を上がるとき、ふいに父・昭夫の顔が浮かんだ。栗山村駐在当時

のふくよかな顔だった。昭夫は走れ、獅子のように走れと叫んでいた。低くてよく響く声だった。

上がり切ったその先に井岡が拳銃を構えて、こちら向きに立っていた。催涙ガス除けなのだろうタオルで鼻と口を被い、メガネを眼にくつつけるようにかけていた。顔が青白く憔悴していて、軀が揺れ朦朧としていた。井岡の後ろに、催涙ガスを吸って身動きできなくなった茂木恵美子が唸り声を上げ横たわっていた。

吉川は、井岡に近づき、リボルバーの引き金を引こうとした。しかし、いち早く井岡のベレッタの火が噴いた。

吉川はギャーと叫んだ。

顎の下に直撃弾を食らったのだ。衝撃に軀が前のめりに倒れた。喉から頭に掛けて激痛が走った。血が吹き出てきて燃えるように熱かった。

必死に脚を踏ん張り、顔を上げて前を見ると、相原の姿が見えた。相原は、大きな声をあげ猛然と井岡に体当たりをくらわし銃を叩き落とし、首を掴み締め上げ、手錠を掛けた。相原は、吉川を見て、死ぬな、生きろと叫んでいた。

吉川の耳に相原の声が響いてきていた。脳裡に一瞬、昭夫の姿がぼんやりと浮かんだ。

その姿を見て昭夫の言う獅子にはなれなかったな、と思いを閉じた。

〔海〕97号より転載

## 海

三重県

### 『海』の舵手と百号への航海

同人雑誌『海』は、一九六六年六月に三重県四日市市で誕生しました。高度経済成長期の真っ只中で、日本初の石油化学コンビナートが出現した四日市では、大気汚染による「四日市ぜんそく」が発生し公害の渦中にありました。

『海』の初代の主宰者は医師の間瀬昇です。『海』創刊と同じ年に市内に内科医院を開き、五年後には同じ市内にも一つの医院を開いて、かけもち診療を行っています。そんな様子を見ると、公害にさらされた当時の市民の健康問題には、相当深刻なものがあつたものと想像されます。

四日市の郊外は、春には暖かい陽差しを受けて一面に黄色い菜の花が咲きます。四日市出身の丹羽文雄や伊藤桂一は郷愁の思いをこめて自らの小説にその風景を描きました。

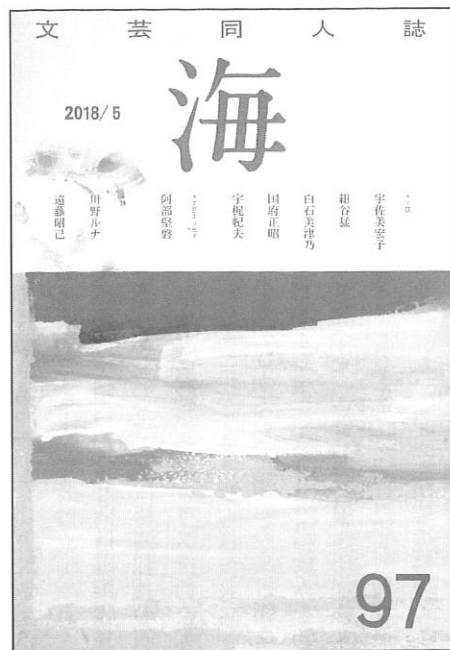
四日市の海から鈴鹿山脈にかけての一带は、温暖でのかな風土と言えます。そこに生まれ育った丹羽、伊藤、村泰次郎、近藤啓太郎などは、いずれも自然主義的なリアリズム色の強い作風ですが、これは温暖で恵まれた自然環境と無縁ではないように思われます。先達作家たちの文学的特質は、『海』を創刊した間瀬昇と、八十三号まで牽引



宇梶紀夫

うかじ のりお

1948 栃木県生まれ  
 宇都宮大学農学部卒業  
 35年間、農業団体に勤務  
 67歳でサラリーマン生活を退く  
 91 地上文学賞受賞  
 2009 やまなし文学賞（佳作）  
 12 農民文学賞受賞  
 「海」「そして」同人  
 朝日カルチャーセンター小説教室  
 受講生  
 神奈川県相模原市在住



役を担った一見幸次の作品にも窺い見ることが出来ます。

間瀬昇は俳句から出発し、創刊号の編集後記に、『海』は四日市の俳句仲間が「以心伝心のうちに俳句だけでは物足りないものを認め合って」同人雑誌をやり出すことになったと書き、続けて次のようにも言っています。

「お互い人間である限り『海』を永久に持続させようとは考えていない。文芸に対してめいめいが、現在にそして未来に、あるがままの情熱を注いでゆけば『海』は続き、そしてふかれてゆくであろう。お互いの信頼を大切に、私はおぼつかない舵手の役割を果たしてゆこうと考えている」。八人ほどの仲間が発した『海』ですが、五十号を迎え





最近の交流合評会。左列奥から手前に遠藤昭己、宇梶紀夫。右列奥から三人目名村和実、その手前に宇佐美宏子

海 〒511-0284

三重県いなべ市夫安町梅戸 2321-1 TEL・FAX0594-77-2770

て名前を並べています。掲載は、書いた作品（小説、詩、エッセイ、評論）があればだけでも可能なわけですが、一応、掲載するかどうかについては作品を拜見した後に決定しています。

初代、二代の主宰の時代と比べて大きく変わった点は、これまでややもすれば閉鎖的であった『海』が外に向かつて大きく開かれ、外の同人誌との交流が盛んになったことです。その中間に、同人の宇佐美宏子、遠藤昭己が活動する中部ペンクラブがあります。中部ペンクラブでの交流を通じて、愛知や三重の同人誌から参加してもらおう合評会も実現しました。『海』からも愛知、三重の同人誌の合評会に参加しています。そして、これらの合評会の様子は常に中部ペンクラブの会報で情報として発信されています。

この紹介文に「文芸に対してめいめいが、現在にそして未来に、あるがままの情熱を注いでゆけば『海』は続き、そしてふくれてゆくであろう」という間瀬昇の言葉を引きましたが、私たちのいまの文学状況を見渡すとき、こうした希望的観測は、やや素朴に過ぎるかもしれません。急激な書き手の高齢化と、それに伴う活力や持続力の衰退と枯渇。これに対抗する秘策はどこにあるのか、百号以後を睨んで仲間とともに手探りしています。

（遠藤昭己）

た一九九四年には間瀬昇が急性心筋梗塞を発症して入院し、休刊の誘惑がたびたび彼を襲います。それでも五十号の編集後記には、「改めて諸兄にお願ひしておきたいのは、書きたい、書かなければ、という自分の内心の衝迫のこもったものを書いてほしい、ということだ。あまり堅いことを言うことは、現代的でないかもしれないが、誌をサロンやラウンジとしたいはなし」と、気を吐いています。

間瀬昇には、私小説的な純文学への思いが格別に強くあり、文学観や作品が同人に与えた影響には大きいものがあります。

間瀬昇に代わって六十八号から主宰となったのは一見幸次で、彼は私小説的味わいを湛えた好短編を多く発表して、常に『海』の中心にいました。しかし一見幸次が残した最大の功績ということになれば、デザイナーとしての力を存分に発揮した『海』の表紙デザインや、海叢書などで示した個性的なブックデザインです。デザイナーとしての才能は、現在でも『海』の表紙の題字の扱いや、目次のレイアウトで知ることができます。

一見幸次の後を継いで八十四号以後は遠藤昭己が編集発行人となり、発行所を四日市からいなべ市に移しました。これまでに九十八号を発行して、百号記念号が目前に近づいています。現在、同人は八名ほどですが、三十六号から掲載同人制となり、作品を掲載したときだけ同人として巻



2009.11.29

合評会。左から四人目が初代主宰者の間瀬昇、右へ遠藤昭己、二代目主宰の一見幸次